

舊約聖書の話

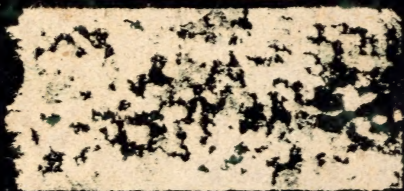
きりう

やく

せい

しょ

はなし



M. E. Miller

✓ Old Testament Stories

Written by one of the
Ladies of the A. B. C.
Board —



Division

SCB

Section

4242

耶穌降生一千八百七十八年

大日本國

神戸上梓

きょうやくせいしょ
はな
舊約聖書の話

明治十一年

米國遣傳教使事務局



Digitized by the Internet Archive
in 2016

目録

第一章	よのはじめのこと	一丁
第二章	つみのこと	七丁
第三章	かいんとあべるのこと	十三丁
第四章	おほみづのこと	十七丁
第五章	あぶらはむのこと	廿三丁
第六章	あぶらはむとやくそくのこと	廿六丁
第七章	あぶらはむのことおよびそのころみ	卅丁
第八章	やくぶてんこくのゆめ	卅五丁
第九章	やくぶのながたび	卅九丁
第十章	やくぶゑそふとのであい	四十三丁
第十一章	よせふなんよあふこと	四十八丁

第十二章

よせふのうられること

五十五丁

第十三章

よせふのらうまいられること

五十八丁

第十四章

よせふとらうやのともだちのこと

六十三丁

第十五章

よせふのゆるされること

六十八丁

第十六章

ゑじぶどのたうときひとよせふのこと

七十五丁

第十七章

よせふきやうだいをもてなすこと

八十六丁

第十八章

よせふきやうだいをゆるすこと

九十四丁

第十九章

よせふちよあふこと

百一丁

第二十章

もうせのこと

百十丁

第廿一章

もうせゑじぶどをたちのくこと

百十七丁

第廿二章

もうせかみさまのおんつげをうけること

百十九丁

第廿三章

もうせふーぎのわざをあらはすこと

百廿八丁

第廿四章

ゑじぶと トんよかゝるのちのわざはい

百卅四丁

第廿五章

こうかいをわたること

百四十一丁

第廿六章

てんよりまなふりたること

百四十六丁

第廿七章

まないやまよてじつかいとうけいと

百四十九丁

第廿八章

きんのこうーをつくること

百五十六丁

第廿九章

まくやのこと

百六十二丁

第三十章

まつりをつかさどるひとのこと

百六十六丁

第卅一章

じうににんのまのびものこと

百七十丁

第卅二章

もうせあゝろんつみをおかすこと

百七十六丁

第卅三章

まんちうのへびのこと

百七十九丁

第卅四章

もうせのまぬること

百八十三丁

第卅五章

よーゆあとらはぶのこと

百八十七丁

第卅六章

よるだんがはをわたりたること

百九十七丁

第卅七章

ありこのとてのこと

百九十三丁

第卅八章

よーゆわのまぬること

百九十七丁

きうやくせいーよのはかー

〔第一章〕

よのはじめのこと

創世記

第一章

そもくまことのかみさまがむかーこのせかいとおつくりなされーことい
さだめてどなたにもよくくごぞんとでござりまーよふ。せんたいかくのこ
ときせかいがにげんのちゑとちからにてつくられまーよふといどなた
にてもおぼしめすまひが。ちよつとわかりやまきたとへでおはなーいたまし
よふなれば。こゝよはこをつくるひとりのさいくにんとさいれもだうぐ
もなきあさべやといれおきはこをつくらぬうちこのへやをでること
いならぬとまうさばこのひとにいかにいたしまーよふ。とてもそのあさ
べやよてだうぐときいれなーよはこをつくることいできますまい。まこ
どのかみさまににげんといおほきよことかひりだうぐもなくまなも
もなーよ。たいおことばのみをもつてこのせかいをおつくりなされまー

た。かくの ときははたらきの ある かみさまゆゑこれを さうぞうーやともま
うーます。さうぞう といは じめてものを つくるといふ わけでその さうぞう
ーやの たくさんあるものでい なくなつた。ひとりで ござります。にんげんのも
とよりてんよりく だりーかみの つかひたちでも ひと一づくのみづもいつび
きのはへも つくることい できませぬ。まかるよ かみさまのたゝむゆかの
うちよこの せかいを おつくりな さいました。その まだいの まづは じめのひ
またゝおことば ばかりで ひかり あれとおほ せられまゝたれば たちまち ひか
りが あらはれあかる さとくらさ といわれその ひかりある ときいすなはち
ひるにて くらさ ときが よるで ござります（はじめのよの はな一よいへる
いちにちの いまの いちにちに あらずひとよといふが ごと一そのひと
よの なんぞんねん かわかりませぬ さだめて ながきあいたと おもひます）。
ふつかめに またおことば にていとたかきところよ みづと つくりこれをく

もといひ。またひくきところよもみづをつくりいちめんよみちまいた。またせかいぢうよくろきとまうてめよみえぬものをいつばいなされまいた。みつかめにいまたおことばよよりみづのなかよたかきところがあらはれみづのことくくひくきかたよながれきてたまりまいた。そのたかきところをりくぢとなづけひくきみづあるところをうみとなづけられました。いまわれくがをりまするところのりくぢでござります。うみのつねよなみがるへまたよろちますなれどりくぢへあがることいござりませぬこれみなかみさまのおんわざでござります。○さてまたこのりくぢにものかはへそだちますよふにおつくりなさりました。このまなとまらすいごこくやらくさきのるいでござります。よつかめにいにちりんぐのつりんほーなどつくりたまひにちりんひるをてらしぐわつりんとはしのよるをてらう。そのよるのひとぐのやすむためよできましたくらきよるでもみちをあ

るくぐらいのできるよふよつきはーのすーのひかりをあたへられま
した。いつかめにいいきものをおつくりなされうをいうみよみちどりの
そらをどびきよすまゐいたーました。むゆかめにいけだものをおつくりな
されまゝ、ひつとりしりま、のたぐひまたのちよはふむーありなどがあらは
れそのおはりよまことのかみさまがごトぶんのおすがたよにせてひとを
おつくりなされました。そのおつくりなされたまかたのちりをあつめてそれ
よいきをするよふよなされほかよなによりもたいせつなるたまーひを
あへられました。ばんぶつのうちにてにんげんをだいいちたいせつとおぼ
しめられたればこそかよふなけつかりなるたまものがありましたわけでござりま
す。○さてそのとどこのわきばらのほねをとりてをんなをおつくりなさり
ました。さてそのつくられたるをどこをばあだむをんなをばあばとまうーま
す。このあだむあばのふよりよよろづのものをまはいするようよなされ

ました。またいでんといふみごとなはなぞのよすまはせそのはなのもり
をすることをおいひつけよなりました。みぎまうりましたとほりかみさま
のつがうよくおごごがでまわがりよろづのものみなきれいよ。ひかり
のかいやきくうきもうるはしくちのあはくと去てにちりんぐはつりん
そらよてらーどりけものそのほかいのちあるものいづれもさいとひあ
り。そのうちにもあだむと急ばのふたりすべてのものよまさりてたふ
とくうるはしくありました。これにかみさまのおんめぐみをかंगाへかみさ
まとはめあがめることのできるちからとあたへられましたゆゑでございま
す。なにゆゑあだむと急ばばかりばんぶつよまさりうるはしくござりまする
か。これにかみさまのふかきおんめぐみをかंगाへてはめあがめ
ることのできるちからあるたまひをうけましたゆゑで。かみさまのかく
べつなるおんめぐみがあれバこそたいせつなるこのたまひをひとばかり

よあたへられまゝたわけでござります。さてそのなぬかめにいもはやおつくりなさる志ごとをおいひなされまゝたゆゑやすみのひと―これをいどまはりとまう―ます。たいいまでもなぬかめごとにいわれくもやすみますすなはらあんそくにちのことにてあんそくといふわけのやすむとまうすことでござります。これをよきひとまう―ますかみさまをほめあがめるたいせつなるひでござります。このむゆかのあいだよおつくりなされ―すべてのものの中にて あだむゑばのほかよおのれのくちにてかみさまをほめあがめるものいござりませぬ。うへにていんのかひたちをたにていんにげんのみかみさまをあがめることができする。それゆゑおたがひよにちやかみさまをあがめねばなりませぬ。あなたがたがかみさまをおあがめなさるをおさくなされまゝたればいかばかりおこゝろうれしうありま―よふか。よろづのものをおつくりなされたまことのかみにんにげんよ

ふかきおじひのひかりをおわたへなされーことを去ばーもわすれずさんび
せねばなりませぬ。これらのごをんとわすれぬよふよおつくりなされたもの
をちよつとかぞへてみまーふよ

はじめのひよひひかり

ふつかめよのくらさときも

みつかめよのちきうとうみまたそれよはへるもの

よつかめよのにちりん、ぐはつりん、ほーいつかめよのとり、ろを

むゆかめよのけだもの、はふむー、にんげん、なぬかめよのものはやなにもおつ
くりなさらずたゞおやすみなされたことでござります

〔第二章〕

つみのこと

創世記

第三章

さてあだむゑはのきれいなるはなぞのよありてどもよさいはひよくらー
びよふきもつかれもあつささむさのくるーみもなく。またでんぢをわらす

くさいばらのるいもなくおもゝろくたのしく^てまてゐました。そのうちよ
よきとあゝきとのちゑのきとまうしてよろゝきみができます。そのみ
をとりたべることにかみさまのきんせいでござります。もゝやあだむゑは
がとりたべましたならかならずまぬるゆゑとることなかれとおはせられま
て。そのほかのきのみひきまゝととりたべることをおゆるいでござりま
した。またつねこのふたりをふかくおんいつくゝみありてはなぞののな
かにてはなゝをなされましたゆゑ。ふたりもまたかみさまをたいせつとい
たいてをりました。まかるゝまことゝなさせなきこと。がこゝゝおこりまいた
そのわけのこのあだむとゑはがつみををかりたることでござります。これ
からそれをおはなゝいたゝまゝよふ。てんのつかひのなかゝわるきものが
ござりまゝて。そのひどりをさたなとまうゝまゝてあゝきつかひたちのかゝ
らとなり。つねゝたふりのさいはひあるをねたみふたりがふゝあはせゝ

なるより又ねがふてゐましたが。かみさまがたいせつよなされるきのみをふたりまたばせつみををかさせてふたりが去ってくる一みのせかいよゆくよりよさそうとかんがへ。あるときへびのすがたよばけてゑばのかたはらへゆきなせそのうるはしきみをとりておたべなさらぬとまろいましてれば。これのかみさまのきんじなされたみゆゑたべますればいのちがおはりまするとこれへました。へびのまことらしくさうめすよこのみをおたべなされましたならかみさまのよろよかこくになりますとまろいましてなほおそれてたべませなんだが。それからこのみを見てきれいなりとおもひまたみていたべくおもひつひひとつとりてたべ。またあだむもわけあたへられてたべましたこのいましめをやぶりつみびどとなりましてさいはひをういなるのみならず。かみさまをみることをはぢおそれてとりました。そのときもりのなかよこゑありてひいさわたりましたゆゑふたり。つみある

みなればあはておどろきまげりたるきのあひだへはひこみかくれんとまて
みまゝたがかくるべきどころもなく。やうくきのほをみよかぶりてか
くれぬまゝた。かみさまのやがてそこへおいでなされてあだむのどこよを
と おたづね なされまゝたれば。あだむがわたくしはぢおそれてかくれてを
りますとこたへまゝたかみさまのなにゆゑはづかきことをいたせしとお
たづねなされまゝたれば。あだむのこゝよともよをりまするをんながおんい
まゝのたいせつなるきのみをとりわたくしよあたへまゝたゆゑつひた
べまゝたあなたのおほせよそむきまゝたことをはぢおんまかりをおそれて
かようよかくれてをりますとこたへまゝた。かみさまのゑばよなんぢのなに
をなせしぞと おたづねがありまゝたればわたくしへのびよみちびかれて
おんいまゝをやぶりきのみをたべまゝたとこたへまゝた。これよよりて
かみさまのふたりのまわぎをおよろこびなされずまたへびをおんにくみな

されてなんぢのろはれていつもつちのうへはひちりをたべよと
たあだむゑばの志そんにいたん又うちかつものがうまるゝであらふと
おほせられまいた（これにこのふたりの志そんよゑゑすきりすとがおうや
れなされておほくのひとぐゑかはりつみをおんあがなひなされさたん
ようちかちてひとぐゑをおすくひなさることをまうたのでござりやすこ
のかみさまのおことばを志んじてふたりの志そんがいろすのごたんじよふ
をたのしみもちてをりまいた）またゑばにわれなんぢのくろうとくはい
にんをますべーなんぢくろうしてこをうみまたつねををつとよまたがへ
よとおほせられまいたあだむよゑんぢのいつもつよくはたらきてつちを
たがへさねばあらずいばらやあーきくさがでんぢよはへてつくりものさ
またげをするであらふ。たべものをゑるよゑひたひよあせをながーはた
らきよはげまねばゑられず。また志やうがいかなーみのうちよすみのちつ

ひよまゝしてもどのつちよなるべーとおほせられまゝた。まてまたふたり
いはなどのよりをひいだされたちをもちてんのつかひがはなどののい
りくちをまもりふたりのきたることをゆるしおせなんだ。かみさまのなほ
ふたりをふびんよおぼしめーかはのきものをおわたへなざりまゝた。この
ときふたりいにかばかりなげさかなーみころよくゐまゝたでござりまゝよ
ふ。このふたりいもはやかみさまよそむきまゝたつみびとでありますれば
まゝてのちふたりのたまーひいづくへまゝいりまゝよふとてもくよろーき
どころへゆくことにかまひますまひ。さてあくまのこのふたりがをのれら
のともとなりまゝたことをよろこびまゝたでござりまゝよふ。ふたりいかな
ーみのなかよなほかみさまのさきよおつげなされーことをおもひだーか
ならずわれらのまそんよいあくまようちかつものぐらまるよであらふと
おもひそのときいわれらのつみもすくゐるよとたのーみてまらをりすこー

のなぐさみごころをもちてゐました。はたしておやくそくをたがへずふたりのほるかすゑのまそん又すくひぬーがおうまれなされこのよのつみをすくふがためじうじかのくるーみをふんみまうけておーになされましたこれがいゑすきりすどのおんことでござります。あなたがたみなく、このかみさまがふかきめぐみをたれてすくひぬーをおくだーまなりましたことをよくおかんがへなされてみごころ又またがひ。いゑすきりすど又すがりつきごころもからだもおまかーなさらねばなりませぬ。さればあなたがたよいかばかりのさいはひがあるかもはかられませぬ

〔第三章〕

かいんとあべるのこと

創世記

第四章

あだむ、ゑばがはなどのをいでーのちよかいん、あべるのふたりのこをうみまいたがそのあまのかいんのはなはだあーさひとよておとうどのあべる

もはじめのよきひとでいざざりませなんだがのちよかみさまをあいまい
 たゆゑみたまのたすけよよりつみをくいあらためましたよよりおゆるいを
 うけよきひととなりました。このきやうだいもそのちよのやうよあせをな
 がてまごどをはたらきかいんのりぎやうをまてあべるいひつじかひを
 まてをりました。もはやこのじぶんよかみさまのはなごののどきのごとく
 いつよよはないをまたりともよあるきたりのなさりませなんだがやはり
 いのりやはな一などをきくとおよろこびなされたことでありました。そ
 のわけのちよいたりてたゞひとりのたいせつなるおんことをおくだいな
 さるくらゐのことであるゆゑよじうぶんよおめぐみなされるおぼへめで
 ざりました。そのうへいゑすのことをかねていどいよまらせるためよ
 い一をつみあげそなへもののだいと一そのうへよたきををきこひつじ
 あるひのこやぎをひもよてくくりきれものよてきりころーだいのうへよて

やきてそなへよとかれがよおをへなされまいた。これがかみさまへそなへ
ものの志かたにてのちよいゑすのじうじかにてくるゝみをおうけなさる
ことのおさといでござります。あべるのかみさまのおほせよ志たがひその
そなへものをいたゝまいたればかみさまのおんよろこびをうけました。かいん
のおことばよ志たがはずこひつじのかはりよくだものをそなへまいたゆゑ
よその志かたとそなへものをおよろこびなされませなんだ。かいんのおのれ
があゝきころをあらためず志てあべるをねたみにくみました。そのとき
かみさまのかいんよなんぢなにゆゑいかりとなすや。なんぢわれをあい
われをうやまふならばわれもまたなんぢをあいすべし。志かるよいまなんぢ
のころはなはだあゝきゆゑかならずとがめをうくべしとおほせられました
。かいんはなほあくじをやめずあべるをねたみにくむころいやまゝある
ひあべるがはなゝなどいたゝてをりますところへとびかゝりてころゝまいた。

そのときあべるのちのつちのうへよまたいりながれつちもわかすみじ
まいた。これがこのせかいにてひとの志にまいたはじめでござります。か
みさまのかいんよなんぢのおとうどのいづれよあるとおたづねなされた
ればわれのわがおとうとをまもるばんにんよのあらずゆゑよおとうと
のこののわれを知らずとこたへまいた。かみさまのかいんのいつはりを忘り
たまひなんぢがおとうこのちのつちのうへよそごたり。なんぢのこれ
らのあくじよよりちよはよはなれあちらこちらをさまよふぞとおほせ
られた。かいんのこれをきよなにぞどかやうなおほきなるばちをおん
ゆるゝあるやうよねがひまいたれば。なんぢのいのちのたすくべし志かあ
ちらこちらをさまよふことののぐれぬとかみさまのおぼせがござりまいた。
かいんのついでとほきくにへゆきいへをもこをももちまいたなれどあき
こころのますくすくみかみさまのみどころよかなはぬもいとなりまいた

あだむ、ゑばのいちにちのうち、かくふたりのこをうしなひしゆゑおほひ
よろれひ。ことよあべるのまがい、かちよよこたはりあるをみてきつうな
げさかなーみまーた。これらのわざはひ、なにゆゑおこりまーたかあなた
がたのどぞんじでござりまーよふとぞんとす。これまつたくよーあーのき
のみをたべかみさまのいましめをやぶりまーたるよりおこりーことで。こ
れのにんげんよなによりかなーきことでござりす。まかーながらかみさま
のまほあだむ、ゑばをめぐみたまひせすといへることをおあたへなされ。そ
のまそんのかみさまのふかさめぐみあることをかんじつね、よろやまひあ
いーまーたゆゑかみさまもまたかれらよおんじあいをくだされまーた

〔第四章〕

おほみづのこと

創世記

第七章

あだむ、ゑば、かいん、せすのいづれもどーがよりてましましたかそのまそん

が、またいゝふえひろがりてたくさんありました。そのうちよきひともありました。またいゝあくにんがいやました。のあとおういするひとのほかにみなかみさまのみごころよかなはず。それよつきこれらのあくにんをいちどよほろばしたやすことよまたよりました。なにゆゑとならばこのよにあくにんをすまはせたまふためよつくられたるよあらざるためでござります。かみさまのあのよきことろにてすなほなるをあはれみたまひてあるひのあよなんぢいちどくをひきつればこぶねよいりみづをさけよ。このよのあくにんをほろばすためおほあめをふらすべしとおほせられました。のあにおんつげよまたがひすみやかよおほきなきをきりおほくのいたをもつてくみたてどびらもありやねもありまどもあるはこぶねをつくりみづのうへよるかぶやうよつくりました。のあにふかくかみさまのおことばをまんどかつおんいかりをおそれましたゆゑひとくよつげま



一羊の擲亞
 をつ族
 をて
 方舟
 小入
 外か
 人ひと
 これ
 をわ
 らふ

らせまゝたれど、あく、にんらんのあざわらふて、すこゝもかまわずたゞのみくひのよく、いんよのみまけてゐまゝた。またとり、けもの、むゝの、いよとみなひとつがひづゝはこぶね、いれよとのあよおまめーがござりまゝた。これのこのよのもの、がみなつきはてるを、おこのみなさらぬゆゑのこと、でござります。のあ、このをーへよ、またがひじぶんらのまよくもつまたとり、けものむゝ、いたるまでのたべものまで、つみいれそなへをいたゝまゝた。とり、いよ、いんはど、からす、わゝ、すいめ、ひばりなど。またけもの、いん、ひつじ、うま、いぬなど、むゝ、いよ、いん、てう、あり、はちなど、いづれも、はこぶねのなかよおど、なゝく、いたゝてゐまゝた。のあ、そのつまと、さん、にんのむすこ、またそのつまたち、すべては、ち、にん、にては、こぶね、よのり、こみたれば、かみさま、いそとより、とど、おまめ、なされまゝた。のあ、いづれ、また、おあけ、くださる、で、あらふと、ま、ん、じ、ま、ち、て、を、り、まゝ、た。さて、その、とき、より、あ、め、の、ち、う、や、や、み、ま、な、く、ふ、り

いだーせかいいらめんみづよりほかめよみえるものありませなんだ。こ
のはこぶねのみづよまたがひたかくりかびまいたなれどあくにんどもいき
よあがろりとすればみづのきよりもたくなりやまへにげようとすれ
ばみづのやまをもこえまいた。このあめまどふにちふりつきそれがため
のわのふねのほかあくにんらのひどりもたすからずことごとくまにまいた
。そーてのあがふねよのりーよりたいていつつきばかりたちてみづも
へりふねもあらうとのやまよどいまりたるゆゑよみづのへりたるをこ
ろみるためよ。からすをまどよりとばーました。またこのときのみづが
たかけれどからすのあらさうまれゆゑみづのりへとどびかけりふたよび
はこぶねへかへりきませなんだ。これよよりはどをどばーまいたかはどの
おだやかなるものゆゑちきよかへりきたるをみてまだみづのたかきをま
りふたよびはどをなかへいれ。またなぬかをすぎてとばーまいたればきの

はをくはへてかへりきたるゆゑきのさきのはやみづのりへよいでたる
ことをのわがまゐりてよろこびました。まかゝまだみづのたかきをまゐりてゐ
ますゆゑまたなぬかたちてのちおなトはどをはなゝまゐられたら。こんど
かへりこぬゆゑぢめんのことぐくあらはれたるをまゐりかみさまがいでよ
とおほせあるとまちてをりまゐた。そののちかみさまがととおひらきなさ
られたらびつとにいでてあはくさのりへゑねむりやぎのやまゑのぼりけ
ものりことぐくよろこびあるき。まどよりいどりるいぐみなとびいでて
きよとまりまゐたまたのわいふねのなかへいちねんばかりもをりまゐた
がいまのみづもへりてかようよじぶんもつま、こ、けもの、むゝまでぶな
んゑふねよりあがりたればいかばかりかよろこばしくありまゝよふかつまへ
のあくにんらのひとりものこらすみなみづのためよほろびてままひまゝ
たがそのなかゑまぶれたちのすくはれたこといかにもありがたきこと

よおもひ。いゝをつみかさねだいとこらへそのうへよどり、けものをそなへおんめぐみのふかきをのべかみさまをまつりおいた。かみさまもこのまつりをおよろこびなされまゝておほみづにてふたたびこのよをほろぼすまひからたとひあめがふるともかならずおほみづのおそれをせぬがよひ。あめのあとでてんよにじをあらはすであらふがこれのわがやくそくの志るゝであるとおほせられまゝた。このにじといふものゝせなたもごぞんじのどほりきれいなるものにてこれまつたくご志んせつなるおんやくそくをおもひいださせるためでござります。そののちいゝがかくだりなされひとぐのみがはりとおなりなされたこともみなおんやくそくのどほりでござりますれがやすくかみさまのおんめぐみをかんにおんれいをまうさねになりせせね。こののちよもまたあくにんのはびこりやすするよがでさますならかならずおんやすしてなざるでござりまゝよう。そのとさわれ

くものあのやうなたすけられたひとおもしなればはやくつみをくむらあ
ためかねてかみさまのみどころまかなふやうないたさねになりませぬ

〔第五章〕

あぶらはむのこと

創世記

十二章

さてのあのまそんをたさいふえひろがりつひよせかいよみちまいたが
のちよのあくにんばかりとなりまいた。これらのひとのきをきりにんぎ
やうのやうなるものをつくりこれよひれふしてつかへこれぞわれらをた
すけわれらをおめぐみなさるかみさまだとまじました。このきやまたの
いよ、かねなどにてつくりたものをかうぞうとまうす。あなたがたの
いかにおぼしめすかこのやうなきやいよかねにてひとのつくりまいた
ものよせいのやうなたふとさものがやどりまよふかのかうぞうなど
ををがみますることかどふしてかみさまのみどころまかなひまよふぞ。

さてこのあゝきひどのうち又ひとりのおぶらはむとまうすよきひとがど
ざりまして 悉くされて かみさまの志もべとなりまして。このひとのともだち
のうどう又つかへてゐましたが。あるときかみさまがおぶらはむをめぐ
てなんぢくにもととともだち又わかれわがをいふるところへゆけわれか
ならずなんぢをまもりなんぢをめぐむとおつげなされました。おぶらはむの
あつくかみさまを志んじておりまするゆゑいかなるところへゆくことかわ
からぬとも おんことば又よりながのたびぢへでかけました。おぶらはむの
つまのさらと志もべまたひつじ、うゝ、ろばなどを つれだちひるのゆく
さきわからずあるきくらゐよるのやまやの又ねてけだもののかはをもつ
ててんまくをはりこの志た又やうやくねむることができました。かくよる
のいねひるのあるきひかぢをへてきれいなくによつきました。そこ
かなんといふところにてかみさまがおほくのひとのなかよりおぶらはむ

をゑらみておすませなされたるくにでござります。あぶらはむのやはりてん
まくのすまひを去てとさぐいーをつみあげそなへものをさーあげいつ
ーんよかみさまよつかへてをりまーた。かくかみさまをあいーつかへおん
ことばを去んじてとほきくにへきてもぐうどうよまよふことこのなきあぶら
はむゆゑかみさまがなんぢのわがともなりわれなんぢをまもりいまより
なんぢをがいのするものなきぞとおほせられかれよあんーんさせられまー
た。どうぞあなたがたよもあぶらはむがじぶんのころよまたがはずたい
なにごともかみさまのみごころよかなふやうよ去てさいはひをゑーごどく
。せいーよのなかよあるとほりかみさまのおことばよすなほよまたがふ
ものいともよてんこくよいらせよふとのおんやくそくを去んじおたのみ
なざるがだいいちよろーきねぐひでござります

〔第六章〕

あぶらはむとやくそくのこと 創世記 第十五章

さてあぶらはむふうふのかなんにててんまくのうちよすまひ去てをりまいたが。つきひかさなりと一つもりあぶらはむもおほかたひやくさいよなりつまのさらもくじらよなりよほどのと一よりでござりまいたれどこどもがひとりもござりませなんだ。あるよかみさまがあぶらはむよてんをながめみよとおほせられたれば。あぶらはむかみさまのおことばよ去たがひあふぎみまいたればかぞへがたきおほくのほーがひかりかゝやさいとうるはしくみまいた。そのときかみさまがなんぢのこがまごをうみまごがまたひまごをうみ去そんなさかえはびこりてつひよかのほーのごとくかぞへがたきよいたるべーとおほせられた。このときさらよまだひとりのこもありませんなれどもかみさまよいつはりなくまことばかりおほせられます

るよよりあぶらはむいおんやくそくをかたくまゐりてまちてをりまゐた。
あるあつきひよあぶらはむいてんまくをすゞききのまたかげよりうつゝ
そのうちよすはりむかふをながめてゐまゐたときむかふからさんになつれ
だちたるものくるをみてはやくむかへひざまづきこゝよおやすみなされ
このみづであゝをおすゝぎなさればんもありますゆるおあがりなされと
いとねんどろよもてなゝました。まてそのさんにないあぶらはむいよいな
はれててんまくのそとまでまゐりまゐたそのときあぶらはむいてんまくの
うちよるまゐたさらよはやくばんをつくりてやけといひながら。じぶんの
こゑたるこゝろをひきいだしこれをころてやけとけらいよいひつけまゐ
た。そのまなくがいづれもどこのひまゐたときあぶらはむいよのちよ
やまたにくをきのかけへもちいだしひるのごせんをさんになよすゝめ
あぶらはむいそのそばよありまゐた。さんにんのうちのひとりかなんぢの

つまのさらのどこよをるとたづねたればまくのうちよをりますとこたへました。そのひとがさらのこをうむであらふとまういりました。そのことをさらのまくのうちよりきくまいてかやうよとよりたるものがこをうむわけのなるとおもひさらよせんせすわらひました。かのひとがさらのなによろゑわれらのいふことをわざわらひてせんせぬかならずこをうむであらふといはれました。さらのこれをきくおほきよおそれおどろきいとゑわらひの志ませなんだとまういりましたけれどかのひとのわらふたことをよくきりてとりました。のちよさんになんのいとまごひきてかへりまするゆゑあぶらはむふうふのわくりていでました。せんたいこのさんになんいかなるひとにていづくよりきたものとおぼしめしますかこれのみなかみさまよりつかはされたるかたぐひにてこれぞてんのつかひとまうすものでござります。そのおんやくそくのどほりさらのそのよくねんこをうみこれ

いさくとなをつけました。かれのよきこにてつねぐ、かみさまをうやまひ
かみさまもまたかれをあいせられましたゆゑふたおやともおほひよよろこ
びました。かくのこどくかみさまのおんやくそくをおまもりなされどより
たるものよこをおあたへなされました。あふらはむのますく、かみさまの
おことばをまんじ。さらもはじめのまんじませなんだがつひよあつくまんず
るところをもちましたゆゑかみさまもふかくおんよろこびがござりました。
さればかみさまのおんやくそくをまもることのあふらはむばかりのつと
めでのござりませぬ。われくもまたたいせつよまもるべきことでござり
ます。われくももなにかおんやくそくのことがあるかどりたがふかた
くもござりまよふが。かねてかみさまのおほせられるよきころをも
つてねがふなればいともたふときせいれいをあたふべし。これがすなは
ちかみさまよりわれくへのおんやくそくでござりまする。これらのこと

からよよりかんがへますればせひどもまんじねばならぬことでござります

〔第七章〕

あぶらはむのこと およびそのころみ創世記 二十二章

さていさくもまだいよとーをとりいつかわかものとなりあぶらはむ、さら
とともよてんまくのすまひをいたいたがひよあい去てさいはひよくらー。
うー、ろば、ひつじ、やぎをたくさんよかひまたまもべもてんまくもきんざん
もなにひとつふじゆうなることなくもちまいたが。これらのものよりまだ
あぶらはむのたいせつよあいするものいすなはちいさくでござりまいた。み
ぎまういたとほりひとりごのいさくいたいせつなれどまたこれよりもあ
いするものがたいひとつありまいたあなたがたのそのものをなにとおぼー
めすか。これいほかのものでいござりませぬこのよをよまはいなさる
まことのかみさまでござります。なにゆるぎぶんのものまたじぶんのむす

こよりもかみさまをたいせつよいたうたか。これのじぶんのたいせつなるろばもひつじもやぎもろしもまたわがこのいさくもみなかみさまのおんめぐみよりてできまうたものといふことをあぶらはむのかねてぞんじてをりまするゆゑ。かくわがこよりもいとたいせつよいたうたわけでござります。かみさまのなほあぶらはむがかみをあいするころのふかきかあさきかをころろみるためあぶらはむよわれなんぢよをいふることありよくわがいふことよまたぐへなんぢわがみちびくところよきたり。いさくともつてだいのせそなへものとせよとおほせられまうた。あぶらはむのいつもこひつじをころい一のだいのせてかみさまをまつりまうたが。いまわがあいするいさくをこひつじのごとくころしてそなへものとするにあぶらはむのみよどりてのはなはだむづかきことでござります。されどあぶらはむのかみさまをなによりもあいなにごともかみさまの

おほせのどふりよまよふとおもひますゆゑすぐさまたきいをるばのせよ
おはせいさくとふたりのまもべをつれさらひてんまくのなかよのこー
おきよにんつれたちいでゆきまいたが。どふくみつかめまたかきやまを
むかふよみ。かこでそなへものとするがすまはちかみさまのをへな
りとおもひ。まもべのすばとともよふもとよまたせおきすばのせより
たきいをるーなはをもつていさくのこーよゆひつけ。かたでよひもと
もちかたでよかたなをもちいさくとともよまよのぼりまいた。いさく
のじぶんがそなへものよされることとのゆゑあらずいつものごとくひ
つじをそなへることとおもひ。ちよむかひひとたきいのあれどひつじ
のなしいかくなさるかたとたづねまいた。ちよのこたへてそのひつじにかみ
さまがおをへなさるであらふとまりて。まだそなたがそのそなへもの
だとのまうーませなんだ。さてふたりのやまのいたきよのぼりあぶらはむ

のいゝをあつめてだいをつくり。いさくのこゝよりたきやをおろしひも
にていさくのてあゝをくさり。ひつじのごとくだいよのせかたなをぬき
ててよもちすでにきりころさうとするときはかよあぶらはむあぶらはむ
とよぶこゑをきこまつた。あぶらはむのわがなをよぶものあるゆゑまば
らくかんがへたればてんのつかひのこゑにて。なんぢがかみをあいするの
ふかきいなんぢがもつともあいすることをもころしてまつるほどのころろ
あるをもつて。はやかみのそのころろをまへりかならずいさくとき
すつくることいならぬとてんよりこゑがきこえまつた。あぶらはむのすな
はちそのおこばよまがひいさくのひもをときだいよりおろしまたれ
ば。ふゝぎやひとつこのひつじきたりてつのをいばらよかけてるまつた。
そこであぶらはむのいさくいさくのかはりよそのひつじをひききたりこ
れをもつてそなへものよいたまつた。あぶらはむのかみさまがいさくを

お加へーなされたおんれいをまうーまいたれば。てんのつかひこゑをたてあぶらはむよなんぢのころとすゝるわびことぐくかみさまのみごころよかなへり。これよよりてなんぢの志そんよせかいのひととつみよりすくひめぐみをあたへるものをくだすであらふどのおんつげがござりまいた。つみよりこのよのひとをすくふものどいすなはちのちよいえすきりすとがひとぐくをてんこくよみちびきめぐみたまふこととござります。のちよはだやのまりあといふをんながかみさまのおんこをうみまいたいすなはちこのおんやくそくありまいたゆゑでござります。さてかみのつかひにてんよかへりあぶらはむといさくといやまをくだりまもべとるばのをるどころのふもとへきたり。ともぐらちつれてんまくのちちへかへりさらよもくはくものがたりまてかみさまのごじあいぶかきみごころをよるこびまいた。かみさまのおことばとにいひながらあいするわがひとりごをこ

ろすまでよ。かみさまのみごころをよく志りてすこしもうたがいのなき
のじつまたふときあぶらはむのころでのござりませぬか。さればひとく
のつとめのおほくありませがそのうちかみさまをあいすることのだい
ちのつとめでござります。これらのはなはやはあなたもおわかりよ
なりやうたこととぞんじます。あなたがたのうちうちはをあいせぬ
おんかたのござりませいが。かみさまのちちはのもとにておやより
もなほたふときものでござります。そのかみさまをあいするのいかいた
したらよろしきや。たゞそれをいはずけらをたてずひとをいやめずして。あ
ぶらはむのやうにかみのみごころをよろこばせるがだいいちでござります

〔第八章〕

やこぶ

てんこくのゆめ

創世記 第二十三章

あぶらはむとさらの志だいよとよりとなりさらのつひよ志にやうた。

これをはふむるためかなんのひどよりすこーばかりのぢめんをかひま
 たらきのはへまげりたるまたまあながありまいたゆゑそのなかへさら
 のまがいをもりまいた。またそののちあぶらはむもまにまいたゆゑいさく
 のはくとひどつまはふむりまいた。あぶらはむのひさくかなんのくにま
 すむことこのまはるかまさりたるてんこくまゆくこといたのーみ
 まいたが。いまそのたまひにてんこくまありてかみさまとともますん
 でとりまよふ。いさくもつまをむかへそのなをりべかとかうして。これ
 もよろしきをんなにてやはりふうふてんまくまひをまてとりまいた。その
 うちふたごをうまいたがこれをまさうまこぶとなづけまいた。このまや
 うだいのかほまにまきつもまたたいさうまちがひるさうのやまがり
 このみつねまどりやけものをもちかへりうまきにくをおますまめた
 べまーまいた。かくかりうどとなりどりやけものをどりまするもわるまこ

とでもござりませぬが、ゑさうの かみさまを あいするよりも なほのみくひ
のよくが かちました。やこぶの またひつじか ひとなりておやの うちにて
ひつじや やぎなど ととも よを りました。ちうの いさくの ゑさうを あい
はの りべ かの やこぶを あいたが ひ ま こ ろ が あ ひ ま せ な ん だ。ゆゑ ま
き や ら だ い の な か つ ね ま あ い く や こ ぶ が ゑ さ り を つ れ な く あ い ら ふ よ
りの ゑ さ う の ふ か く は ら だ ち か れ を こ ろ て う ら み を は ら さ う と か く み ま
た。ある ひ ゑ さ う が お も ふ ま の ち う が ま ん だ の ち の は や く や こ ぶ を こ
ろ す べ ー と ひ た す ら そ の こ ろ づ も り を ま て を り ま い た。は の り べ か の
こ れ を ま り お ど ろ き い そ ぎ て や こ ぶ を よ び。そ な た の と ほ さ く に へ ゆ き
ま ば ら く ゑ さ う の こ ろ さ う と す る を の が れ る が よ い そ の ち ち ゑ さ う の こ
ろ が な ほ り た れ バ つ か ひ を や り て よ び も ど す で あ ら ふ か ら は や く こ
ち を た ち の く が よ い と ま う ま い た。や こ ぶ の は の を へ ま ま た が ひ

ちとほくよいとまをこひ去もべもつれすたゞひとり。ひつじもろばもや
 ぎもな―ともなふものつゑひとつかないながらたびだちをはじめま―
 た。かれのまづ―きひとりたびゆくさき去らぬおはれさのひるのあるきて
 あ―つかれよるのとまるよいへもなく。てんまくさへもたづさへねばい
 ーをまくらよつちのうへよ去ば―のゆめをむすびま―た。かみさまのかれ
 のみのうへのいとゞなんぎをめぐみまもりたまひ。去くおほかみのおほ
 きどころなれどわざはひもなくたびをいた―ま―た。あるときやこぶがね
 むり―ときてんまでとゞくは―ごありてそのうへよのぼりくだるてんのつ
 かひあり。いとたかきところよのかみさまがやこぶよわれこそあぶらはむ
 いさくのかみ。なんぢをまもりなんぢを去てふたゞびうちへつれきたりな
 んぢがねむり―そのくによ。なんぢの去そんをすまはずべ―とこれぞや
 こぶのゆめよ去て。さめてのちおほひよこころよちからをそへこのゆめ

をいつまでもわすれぬためまくらよきたるいゝをもつてゆめの来るゝと
いたしました。やこぶのまつりをするよひつじもなくそなふべきものな
きゆへいゝよあぶらとそとぎかけ。まことのかみよわれをまもりたまふ
ならたべものきものをあたへたまへふたぶわがいへよかへらせたまへ。
あなたこそわがかみこのいゝのすなはちあなたのいへなりとまうしま
た。やこぶのまことのころをもつてかみさまよいのりかみさまのおんや
くそくをよろこびいつかわがうちへかへるであらふとよつこびまつてを
りました

〔第九章〕

やこぶのながたび

創世記第二十九章

さてもやこぶのながのたびぢをあるきつめつひよあほくさおほきどこ
ろよつきました。そこよひとつのゐどありてみづのきよくみえたるゆゑ

やこぶはそれをのみたくおもひぬどのそばへゆきまゐた。もとよりこのちのみづもともいきゆるやこぶはこのみづをきつうよろこびまゐた。このときひつじをつれーひつじかひがはうぐよりあつまりきてをりまするゆるやこぶはそのひとぐはやくぬどのふたをとりあなたがたのみわたくしともすこーあたへられよとまうまゐれば。そのものどものみうすよこのところのひつじをかふものみなあつまらぬうちこのふたをとらずみなあつまりてのちふたをとりいちどよのむためまちあはしますとこたへまゐた。やこぶはこのひとぐはむかひもーやこのちよらばんといふひとがおりますがそのひとをお去りなされぬかとたづねまゐた。このふはんといふひとのすなはちやこぶのはうがをへまゐたやこぶのとちのことでござります。そのときひつじかひがやこぶもそのひとのわれらよく去つてをりますがたゞいままめでゐられます。去てまたそのむすめ

らけるといふものもひつじをかひやがてこゝへまいりまふよふとこたへ
まいた。はたしてらけるもひつじをつれそのゑどへまいり。すべてのひつ
じかひことごとくあつまつたればやこぶのやがてそのゑどのいーのふた
をとりおろし、みづをくみとりらけるよわたへまたひつとよものませぢ
ぶんもみづとのみまいた。そのあとでらけるよむかひわたくーのあなた
のいどこであるとかはーくものがたりいたればらけるのきよておほき
よよろこびふたりがたがひよてをとりてられーなきよなきまいた。やこぶ
のくにといへをはなれどほきどころよたびとまてともだちひとりもな
きみゆゑいどこよはからずあひまいたの。さぞうれしくあつたでござりま
しよふ。らけるのはやくもわがやよかへりちよよかくとつげまいたればら
ばんのわがやへつれかへらうとおもひ。はーりいそぎてゑどばたへゆきわ
れこそなんぢのをぢなるぞといひてやこぶをひきつれかへりまいた。やこ

ぶいそこにてあーとどいめてたびすることをやめ。志もべとなりてそのいへのひつじをかふてよきひつじかひとなり。さむさあつさのいどひなくひつじのためよきやくまのきたりどらぬやうよるひるもりを志てをりまいた。らばん又いりや、らけるといふふたりのむすめがありました。ふたりともやこぶのつまといたまいた。いまのひとぐいふたりのつまをもつことよからぬわけをよく志りまいたなれど。やこぶのとき又いまだたれも志りませんゆゑかくふたりのつまとやこぶいもちまいた。やこぶまたくさんなるがござりまいたがこれいあまりおはなীগながくなりまするゆゑまうませぬ。やこぶいつまことどもよらばんのひつじをかふてゐまいたればのちらばん又ひつじややぎをもらひまいた。またかみさまよりいおんやくそくのどほりたべものきものなごふじゆりなきやうおあたへがござりまいた。かくどーつきおほくたちまいたれどやこぶいなほち





飼^かを羊^{ひつ}の班^{ばん}拉^ら各^ご雅^や

はゞのことどもだちのこと。また**おぶん**がをさなきときすまひせーくに
のこと。ならば**おぶん**の**おそん**よ**かなん**のくにをあたふるとの**かみさ**
まのおんやくそくなどのことをおすれずいつかそのちよすまをふとた
のーみおちまいた。いま**かなん**よすまひたるよきひとぐいのなをかきあら
はーまよふ**あぶらはむと**つまのさらそのこいさくそのつまりべかそのこ
やこぶその**つまふたり**すなはちりや、らけるでござります

〔第十第〕

やこぶ、**あさう**とのであひ 創世記 第三十一章

やこぶいふるさとのことをいとなつかしくおもひいまのころもどいめ
かねある**ひらばん**よむかひいひまするの。いままであなたの**おもべ**とな
りながのどーつきをおくりまいたがいまのくにもどへかへりたくおも
ひまするといひまいたれど。らばんのなかくきく**いれず**おだいよやこぶ

のあいらひをあらく去すゆゑやこぶにいよくころをさだめくにへかへることのたくみを去てゐました。あるひひつじをかふてゐたるときはからずねむりてゆめをみました。そのゆめやこぶよなんぢのころをさりちゝのもとよかへるべし。われいかならずなんぢとともよをるべしとさくといどくめのさめましたがこれぞまさしくかみさまのおんつけのことばでありました。やこぶのすぐさま去るべしをつかはしりやとらけるをよびよせてありしことをときよかせくにへかへるべきことをもつげたればふたりもともよかへりたひとねがひました。やこぶのよろこびてんましくやそのうちよある去なくをとりかたづけらくだとるばのせよおはせつまとさういちにんのことをももらくだよのせ。去るべしひつじやうーややぎ、ろば、らくだをひかせてそのところをいでさりました。らばんのころよりはなれたるところよをりましたゆゑはじめよのきがつきませ

なんだがのちよこのことをきくおほきよいかり。あとからおひかけてきてひとたびうちよかへれとまうーまいたれど。やこぶのなかくきくいれずかなんをさしていそぎまいた。さてやこぶのかねてあにのゑさふよいみにくまれてゐることゆゑこのたびくにへかへりたればいかなるうきめよあふであらふかと。こればかりやこぶのころよかけにちやかみさまよいのりまいたが。このときゑさふがまひやくにんのけらいをひきつれてきたるときよさてのわれらをころすためよくるのであらふとおほひよおそれまさりよいのりまいたればかみさまもふかくやこぶをめぐみたまひみちにてさはりのなきやうよおまもりなさりまいた。さてやこぶのおのれのみまごころをみせるためよりやひつじやろばやらくだをまもべよひかせてゑさふへこれをおくらせそてやこぶのそのよひとめもねずかみさまよいのりまいた。あくるあさやこぶのゑさふがおほくのけらいをひ

きつれきたるをみて。にげずよこれ又ちかづきこゝを かゝめ ねんごろ よ
な た び ば かり お ぎ を い た ま へ た。その とき お さ ふ も こ ろ と け は り
 きて や こ ぶ を い だ き ふ た り と も よ ろ こ び な き の な み だ を こ ぼ ま へ た。か
 く こ ろ あ い き お さ ふ が ま ん せ つ よ こ ろ の や は ら ぎ た る も。まつたく か
み さ ま が か ね て の い の り を お き な さ れ た こ と ふ か く や こ ぶ の よ ろ こ
び ま へ た。お さ ふ の ら け る、り や その ほ か こ と も な ど を み て た づ ね ま へ た
ゆ ゑ や こ ぶ が こ れ の み な か み さ ま が わ た く こ と も よ さ づ け て く だ さ れ た も
 のである と つ げ ま へ た。ら け る、り や を は じ め お も べ も こ と も も み な あ た
ま を さ げ あ い さ つ を い た ま へ た。この とき い ち ば ん ち い さ き こ の よ せ ふ
も じ ぎ と ま ま へ た。お さ ふ の や こ ぶ よ さ き の け も の の た れ の も の に て
い づ く へ ゆ く も の だ と た づ ね ま へ た れ バ。や こ ぶ の す な は ち あ な た よ さ い
あ ぐる た め ひ き ま い り ま へ た と ま う ま へ た。お さ ふ の じ たい を ま て う け ま

せなんだがやこぶのころざしをかんにてつひももらひました。かくおほくのうーやろばややぎなどをかみさまがみなやこぶもおあたへなさりませるゆゑやこぶもおしらすゑさふもあたへたことでござります。ゑさふのやこぶをわがすむところへつれてかへらふとまうーまいたれどやこぶのおほくのこゑもやけものがあつるゆゑよわかれてあつよりゆるくゆきますとこたへました。それゆゑゑさふのころざしよりとほきくにへかへりやこぶのかなんのかくにすまひいたりました。やこぶがとりわけかなんをあいここよすまひいたりますも。これみなかみさまのおんみちびきでござります。さてやこぶがまへもおもろきゆめをみたるときそのばをわすれぬためいーのゑるーを去ておさまたがいまそのゑるーをみいだーかみさまのおんやくそくのこゑもまたいろくのせろぐけものまでじゆるぶんもあたへなされたることをかんにまたいーのたいをこらへそな

へものをいたしました。かやうよやこぶのかみさまのおんたすけをうけ
ました。これのかみさまが、かみさまがおめぐみなさるわけでのござ
りませぬ。おたがひよかみさまのみごころよ、またがひますなれば、かみさまの
やはりやこぶをおめぐみなされーやうよわれくよもきものもたべもの
もそのほかいろいろのまなく、なにひとつふそくなく、たださるでござりま
しよふ。そればかりでなく、まんかうよよりふまんせつなるひども、まんせつ
となり。あくにんもわれくよたいてよきことをするやうよなります。
このやこぶのはな一をよくくおかんがへなされて、かみさまのみごころを
おさとりなさるがよろしよござります。

〔第十一章〕

よせふ なん よあふこと

創世記第三十七章

さてもやこぶのこよりたるちよふたよびあふこととえておほきよよ

ろこびどもよくらしてゐましたがいさぐんだんくどしよりとなりつひ
よ志にまゝたゆゑやこぶのゑさふとともよあぶらはむとさらをほろむり
いあなへいさくをうづめました。そののちゑさふのかなんよのすまはずや
こぶばかりつまことどもよおほくのひつじをかひながらそのところよ
すまひ志てをりました。やこぶよのじふににんのこがありました。その
うちよせふとまろゝまするこの志もからにはんめのこにて。いちばんよ
ろゝきものゆゑつねよやこぶのためよかわいがられ。そのほかのきやう
だいのいづれもあくにんでありました。志かゝそのうちのべにあみん
とまろゝまするこのまだをさなきものでござりました。さてそのあくにん
のきやうだいたちのひつじややぎをかふためよとほくゆきておほくの
いへよをりませなんだ。をりふいへよかへりてひとつよをりませよき
のいつもよせふとてあらくあつかひました。それゆゑやこぶのなほさらよ

せふをわはれみあいするとあくにんらのすくねたみにくみまいた。
 やこぶに あるひよせふがころだてのよきをよろこびきれいなるうはぎ
 をあたへまいた。このきものいあを、そらいろ、あか、むらさき、もろいろにて
 いときれいでござりまいたがよせふのつねよそれをきてゐまいた。よせふ
 のあるよゆめをみまいたがそのゆめよきやうだいとともよはたけのむ
 ぎをかりたばねてをりまいたら。きやうだいのたばがよせふのたばよむか
 ひおじぎをいたしまいた。よせふのめがさめてたいそりふーぎよおもひきや
 うだいよくはーくはなしてきかせまいたら。あくにんらにこれをきてお
 ほきよはらだちこれのまつたくをさなきみで ありながら われくよじぎ
 をさせやうとてかようよいふのであらふとおもひますくよせふをいみ
 にくみまいた。そののちよせふにまたもやふーぎのゆめをみまいたが。その
 ゆめのひとつきとじふいちのほーがよせふのまへよおじぎを忘た

ゆめでござります。そこでこのゆめをいよくふらぎもおもひそのこと
とちよときやうだい又はなましたれば。ちよのおどろきそれならそのにち
りんわれぐはつりんのはよじふいちのはいのきやうだいなり。さて
かみさまのおまらせにていつぞのゆめのとほりよなるであらふところ
のうちよおもひました。が。よせふのたかぶらぬようよ。たれもそなたよじ
ぎをするものはないといひ。かみさまのまらせであるなどといふこと
のすこしもやうませなんだそれらのことよよりきやうだいのますくよ
せふをにくみよきをりあらばたばかりてよせふをころしうらみとほらさふ
とたくみました。あるとききやうだいたちのひつじややぎをかふためよと
きはどころへゆきひさしくかへりてきませなんだがやこぶのかくきやうだい
たちのころよなさけなきわるたくみのあることすこしもまらせとは
きよゆきたるむすこらのやうすをきくためよせふよいひつけてきやう

だいとひつじのやうすをきよてこよとまうーまーたらよせふのちうのい
ひつけをまもりすぐさよいとまをちうまつげ。まもべもろばもなくひど
りわがやをいでとほきたびぢ又おもむきました。そのときもかのちうよ
りもらひましたきれいなるうはぎをきてゐましたが。こどもごころ又もさ
ぞちう又わかれることをかなしくおもひはやくかへりてちうのかほをみ
ることばかりたのしみ又ゆきましたでござりまーよふ。それよりよせふの
ひろきのはらをあちらこちらとさがしてゐましたが。ひろきどころなれば
きう又のみあたらすやうやく志て。はるか又きやうだいのかげがみえまー
たゆゑよろこびいさみてゆきました。あくにんらのよせふのくるのをみ
てたがひ又かほをみあはせてあれこそわれら又じぎをさせやうとの
ゆめをみたといひーもの又いあらずや。よりくいまのかれをころして
ひごのうらみをはらーちうのまへ又い志かくまか又くはれたで

あらうといふべしとさうだんどのひいまやきたるとまぢました。よせふ
のそれとも去らずきやうだいよはやくあひたくおもひはせきたるをてあら
くひきとらへてものをもいはずひとうちようちころそうといたりました
そのありさまい去るやどらのむれのうちよこひつじいつびきいたるが
どとく。よせふのものをもいはずたすなほよ去てをりました。そのとき
るうべんといふひとりものぐすこいふびんのころをもちいまこの
ところにてよせふのいのちさへすくふておかバのちよのまたおれがち
ちよあふこともかなふべしにもかくにもひとくふう去ていのちをたす
けたきものとおもひそのきやうだいらいひますよのいまこゝでよせ
ふをころすよりも。いきたまふあなよなげいれてくるしませるほりがよい
でないかとまうしやうたればきやうだいいづれももつともとこのことよ去
たがひよせふのきてゐるきれいなるきものをぬがせはぎとりました。この

ときよせふのころのちちよいにかばかりかなしくおもひまいたらふかさ
だめてこゝまでくるみちすがらいちにちもはやくわがやよかへり。ちち
のかほをみてきやうだいのへんじをきかせよろこばせたくおもふてきま
たらふものよけものよまさるあらしきやうだいたちのよせふのころ
をふびんとおもふものとしていひとりもなくとふくはだかよまたうへ
あなのなかへなげいれみづもたべものもあたへねば。よせふのくるいみ
おほかたならずなきさげべどもめよもかけず。あなのそばよぬすはりて
ごせんをたべてをりまいた。このあしきやうだいたちのふるまひをかみさ
まがよよくごらんなされておんにくみなされるともえらぶ。おのがこゝ
ろよまかせてますくあくえんをぞうちやうのちようくるくるいみの
たねをまくことござります

〔第十二章〕

よせふのうられること

創世記第三十七章

さてそのときよむかふよりおほくのひとがらくだよのり。あたひのたか
きかほりものどほさくにぐようらうとてきたるをみかけ。きやうだい
のうちのゆだといふものがせんをたべることをやめ。あれのひとを
かふものなればよせふをあれよりうてのいかゞといひまいたら。きやうだ
いのいづれもよろからふとてそのひとよこのものをあなたより
ませふがねだんのなにはほでござりますかとたづねまいたれば。ぎんにじ
ふまいよかひとりまよふとまりました。そこできやうだいたちのかの
ひとぐをつれてきてあなのそばにまたせおき。よせふをひさだててわた
しをたればかのひとぐのよせふをつれどほさくにをさしてゆきまいた。
よせふのちのいひつけよまたぐひとほさくにへはるぐきて。やうや

くきやうだい よめぐりあひよろこびかたるあいだもなく。すぐさまあなへなげいれられればかりでなく。たこくのひとようられていまにくにへかへることさへならず。いつまたちよあはれるかころのかなみやみまなくなみだともよそのつきひをおくりまいた。きやうだいらいすでもよせふをうりわたりかねをうけとりたがひよさうだんどのひて。やぎをころしてそのちをとりよせふのきものよそれとぬり。ちよよみせていつはらふとかねときものをたづさへてわがいへさしてかへりまいた。とよりたるちよのやこぶいなかく。こどものかへりこぬそのるすを去てをりまいた。あるひかどのかたよおほくのひつじのあーおどするをきよ。わがこがかへりたのであらふといそぎむかひよいでまいた。わらきこどもいみなをれどころよかえるかのよせふをらぬゆゑよせふいいかよとたづねまいた。このときひとりのものがきやうだいのなかよ

りちまみれのきものをもちてあらはれいでちくのやこぶよまうすよの。
われらのこれをみちにてひらひまいたがもーやよせふのうはぎでわ
りませぬかとまうました。やこぶのみるよりおほきよかなーみこれのわ
があたへたるよせふのきものよさういなし。このちのつきーのなにゆ
ゑぞやまゝおほかみのためよはかなくいのちをとられーかと。いまさら
きやうだいをむかひよやりーことをくやみたえいるばかりよなきまいた。
きやうだいたちのちくをなぐさめておあきらめなされませといひまいたら
やこぶのまうますよのもはやさいはいなきわがみなれバ。かあいひよせ
ふのはかよつれゆきわがみもいつよよはふむれとくりかへーつなき
ました。あはれややこぶのどーよりたるみにてあいするよせふよあはれね
バ。をさなきべにあみんをすこーもはなさず。もはやよせふのことよこり
ふたごびはかへないだすことなくいへよばかりおきまいた。あーききやうだ

いたちのよせふをうりたるつみをかくすため。とよりたるちよもうそをいひかみさまがよくくごぞんじであることをもまらす。つみよつみまかさぬるあくにんのあはれなことでござります

〔第十三章〕 よせふのらうよいられること 創世記第三十九章

さてもこのじぶんよひをうりやうまのやうもうりかひすることかはやりまいたが。そのうられたものをどれいとまりてこらえられぬほどのはたらきとさせられてゐました。このことのちかごろまでもくにぐよていたりました。いたつてゐるきならばいでござります。よせふのすでよこのどれいようかれいともとほきゑじぶどのくにへつれゆかれました。よせふのさいはひよきひとにてまかもそのくにのわうさまのおそばをつとむるおはがねもちにてそのなをばてびるとまうすひとのどころへゆき

まゝたゆゑよせふをはたけなどのまごともいつかはすいへのうちにて
こづかひといたしておき。ほかのどれいのやうななきなるゆゑのあは
せませなんだ。よせふのうちにやくにもとのちよのことばかりこゝろよか
かれどもこのちよきまもべともならば。またもちよあふことのでき
ぬことのあるまひとまあんをさだめなにごともまゆじんのいひつけよ
そむかず。よきまもべとなりておもふのぞみをなとげようといふこゝろ
よくつとめまゝた。このまじぶとのくにびとにいづれもぐらぞうよつかへ
てゐまゝたが。よせふのいつもぐらぞうををがむことなくまよろじきよま
てよくはたらきますゆゑまゆじんのまごこのかみさまがいつもよせふよ
ありておまもりなさることをさとり。ますくよせふをあいわがるすよ
のいへのことをのこらすひきうけてまてくれよとまうつけ。またほか
のまもべやどれいもよくよせふのことばよまたがひまゝた。これみなよせ

ふがつねぐまことのころにてかみさまよつかへまたひとぐまもま
 ことにてつきあひまするゆゑ。いづれもそのひとつのまことよかんじてか
 くものごとがほどこよくまいりまするのでござりまよふ。ふらぎもよせふ
 があづかりといたますることになにごとよよらずはかどりうーやうま
 りよくこえふどり。さくもつりよくみのりまするゆゑばてびるりますく
 かれよものごとをうちまかせてをりました。よせふりすでよはよよまに
 わかれちよとおどろよりいさわかれなにごどいまひとたびとしよりたる
 ちよとをさなきおどろよあひたきものよつねよころよわすれずあん
 じてをりました。まかるよひとつのわざはひおこりよせふのためよはなは
 だかなしきごとがでさました。そのわけをいまあなたがたよおはなまう
 ーまよふ。このばてびるのつまりころさまのよろーからぬひとにて。
 いつーかよせふのかほかたちのうるはしきよころをよせあしきことよ

いひかけました。もとよりよせふのたゞしきひとゆるすこゝも、まようち
せずそのやうなだいなくをはたらいてつみをおかすことのできませぬと
はねつけました。かのおんないなほこりもせずあるひよせふよむかひ
いやらしきふるまひをいたしました。よせふのそのやうなあしきひとのそ
ばへのかたときもをること、このみませぬゆるうはぎをそこへすてお
ひてそとへいでました。このときばてびるのつまのたいそうよせふをうら
みまゆじんのかへりをまぢかねてかのよせふがすておきたるきものをま
ようこと。あちらこちらよよせふとつみよいひこらへまゆじんよわ
るつげいたりました。これぞよせふがながきくるしみをうけるもとにて
またいちばんまきはせともなるもとでござります。なんとみなさんかみよ
またがふてたゞしきことをするものやたゞしきことのためよくるしみを
うくるものかみさまがかならずおみすてなされませぬなほつぎのはな

をおきくなさい。そこでばてびるの、おろかよもつまの、ことばよだまされ
 ておほきよはらをたて。よせふをらうやよいれあーをバくさりできび
 ーくくーり。ほかのつみびととおなじやうよくるーきめよあはせまーた。
 このつみびとらにいづれもあくじをいたーたものなるよそのなかへか
 くひとのよきよせふをばいれまーたこといなさけなきありさまでござり
 ます。まかーよせふのうれひのなかよひとつのおあはせがござりまーたそ
 れのつみびとをあづかるらうばんよころだてのよきひとありてよせふ
 のひとがらよきをあいーときぐものごとをいひつけてためまーたが
 よせふのよくそのさーづよまたがひまーたゆゑ。らうばんもたいそうよろ
 こびつひよよせふのあーのくさりをときじゆうよらうやをあるくやう
 よどりはからひらうやのなかのかーらときてつみびとをあづけまーた
 よせふのたびくくるーきめよあひますれどかくなくさめらるゝことのお

るにまつたくかみさまのおんめぐみとそのたびくよえんかちのころ
にやすくつよくなりまいた

〔第十四章〕

よせふとらうやのともだちのこと 創世記第四十四章

さてそのゑじぶどのわうさまのおほくのけらいをもちまいたがそのうち
のおえやくにんとおきうじやくのふたりがわうさまのぎよいよそむさ
まいたがわうにふたりをばてびるよまかせてらうやよいれさせまいた。
ばてびるにふたりのつみびとをうけとりわがやのらうよいれさせてよ
せふよあづけまもらせまいた。かくよせふをえんじあいまいたなれどまだ
らうやからいだませなんだ。えかーよせふよいもとよりつみなきことを
えりてをりまいた。さてよせふにあづかりふたりをひとくころよいれおさ
ばんやみづなどよよくころをつけてやりまいた。あるひのあさよせふ

にらうやをみまはりまーたとき ふたりのものいろいろあをさめ せんばいの
ありそうな かををきておりまーたゆゑ なんぞせんばいがありますかとと
ひまーたらふたりがこたえていひますよわたくーどもにさくばんたいそう
ふーぎのゆめをみまーたがそのゆめのわたくーどものみのうへよな
かわけのありそうなゆめゆゑそれよつひてきつり せんばいいたーますと
いひまーた。よせふのこれをききてふたりよむかひそのゆめのとふいふ
ゆめかわたくーよはなておきかせなさいかみさよのいつもわたくーをお
まもりなさるゆゑあなたがたのためよいまかんがへてあげまーよふ。その
ときおまやくにんのいひますよわたくーのみたゆめのぶだうのつるよさ
んばんのゑだがありてみておるうちよつばみができつひよはながひ
らきそのうへよくみがいりてじゆくーまーたがわたくーにそれとじぶん
のてよつみどりさかづきよまばりてさけよいたーいつものやうよわう

さまのまへよもちゆくとおぼへてそのときゆめのさめまゐた。よせふの
まうーまするよそのさんぼんのゑだのみつかまたとへたものにてあなた
のいまよりみつかめよゆるされてもとのとほりわうさまのまへよおまや
くをなさることのできるゑらせでござりまよふとはんじまゐた。そのつ
ぎにおきうじにんのゆめにていまおまやくにんのゆめはんじがたいそら
よかつたゆゑじぶんのゆめもよからうところのうちよおもひながらよ
せふよむかつていひますの。わたくしのゆめのあたまのうへよゑろきみつ
かさなりたるかどがありてそのうちよたべものがありまゐたがそらより
とりがきてそのたべものをたべるとおぼへてそのときゆめのさめまゐた
といひつゝわたしもおなじくみつかめよわらのゆるーをうくるのかと
よせふのへんじをまぢかねておりまゐた。ゑばらくたちてよせふのまうーま
するよのこれのたいそらよろくなひゆめでござりますこのみつかのう

ちよわうさまいあなたを 忘ばりてきの うへよかけまーよふその ときそら
よりとりがきてあなたのほねとにくをたべる 忘らせでござりますといは
れておきうじにんのあんよさうぬーおほさまかなーみまーたがせひもな
きことでござります。その ときまたよせふいお 忘やくにんよむかひもー
あなたがゆるされてわうさまの 中へよおでなされたときいぶぞわたくー
のはかなきみの うへをわうさまよおつけくたされ。ふーあはせよもどほさ
くにようられてどれいとなりたるその うへよつみどがなーよらうやよ
いれられまーてとはじめおはりをものがたりてねんどろよたのみまーた忘か
ーきやうだいの あーきことなどいすこーもまうーいいたーませぬ。さてそ
ののちはたーてみつかめよ 忘じぶどわりいばてびるのもよつかひをや
りてかねてらうやよいれおきたる 忘やくにんときうじにんの ふたりをら
うやよりいだせよといひつけまーたゆるふたりい はじめて らうやを ぞやー

たがよせふがゆめはんじをいたしまたどほりおまやくにんひゆるされ
おきうじにんひころされまた。まかるまかのおまやくにんひまことなき
ひとにてゆるされたのちよせふまたのまれたことひさらまうちわすれわら
さまのおまへまいでながらそのことをすこしもまうしませなんだ。よせふひ
もはやたれかきてわがみをらうやよりいだしくれるであらふとちうや
またてをりまたがそのうちなつもすぎふゆがくれせもひとりもよせふ
ひよぶものなくよせふのころひじつはあはれなものでござります。か
みさまがつねまよせふをおまもりなされるならばなせこのやうまたびく
くするきめまあふであらふとあなたがたひおうたがひなされるでござりま
しよふがこれこそかみさまのふかきおんころありてかんなんまんくをた
へまのふおぼへをさせるためでござります。それゆめまおたがひままんば
らうがだいじでござります

〔第十五章〕

よせふのゆるされること

創世記第四十一章

これまでだんく、まうーまーたわうさまといすなはちあふりかゝのゑじぶど
といふくにのてんーにて。そのなをばるとまうーまーてきんのかんむり
をかいらゝいたゝきてゝいんきんのゆびわをはめくびゝもきんのかざ
りをつけきものもきれいゝかざりたてりつばなごてんゝうるはゝきざを
かまへおほくのけらいをまへとらゝゝならべ。ばゝやゝのりてみやこ
のまぢへいでますときんくにのひとぐゝがいづれもかいらをつちゝつ
けいとたいせつゝいたゝまーた。このわうさまがあるばんゆめをみまーた
ゝいかはのきゝゝまたゝひとりたちてゝあまーたらこゝゝひとりたるゝちひき
のらゝがきてそのあたりゝあるあをくさをたべながらゝあそんでおりま
するとそのところへまたこのらへもなくやせおどろへたらゝゝがそのか

すもおなじく煮ちひきかはのなかよりあがりきてさきよりこゝよぬま
する煮ちひきのこえたるうーをくひつくーまいた。煮かーそのやせたかた
ちのやはりおなじことであるとおぼえてめがさめまいたがそのまゝお
たひとねむり煮てゆめをみまいたよこんどいなゝつのほをもちてよく
みのりたるこくもつがいとのびくとはえいでたるをそのそばよりお
なじくなゝつのほをもちたるみのなきこくもつがあらはれいでさきの
よくみのりたるこくもつをのこらすくひつくーまいた。そのときわうさまの
めがさめてそのふたつのゆめをふーぎよおもひよきゆめかわるきゆめ
かはやく煮りたひものとよのわけるをまちかねておほくのけらいとこく
ちうのぐーやをあつめかのゆめのこゝろをたづねまいたれどたれひと
りそのこたへをするものがござりませぬゆるわうさまのおほきよ煮んば
い煮てをりまいた。このときまへよらうやからゆるされたるおまやくにん

がふとよせふのことをおもひだす。かれまたのまれたことをわすれてひさ
 しくすてやりよゑておひたことをこらくにいゝわらさまよむかふていひま
 すよにいづぞやわたくしとおきうじにんとふたりつみをおかしてぼて
 びるのらうやよをりますときふたりがふゝぎなゆめとみまいたゆるおな
 じらうやよとるよせふといふものよはんだんをいたしてもらひまいたれば
 そのはんだんよすこゝもちがはずひとりいころされわたくしばかりおゆる
 ーをうけました。あのよせふことをたいいまのあなたのおんゆめをときます
 でござりまゝよふとまうゝわけか。わういそぎそのよせふといふゆめ
 はんだんのじやうづなるものをこれへつれきたれといひつけました。けら
 いのすぐさまぼてびるのいへよゆきらうのなかよりよせふをよびいだ
 ー志かくのことよよりいまなんぢをゆるゝわらさまのまへよつれゆく
 なりとよせふよまうゝました。よせふいひさゝふりにてらうのことへでる



約瑟の夢を明かす

ことができておほきよよろこびました。ながく、らうのなかよをりました。ゆゑきものなごのたいそうみぐるくありました。がいまのあたらしいきものをきせかへきれいにきてわりのまへよつれゆきました。わうさまのよせふのきたるをみてなんぢのよくゆめはんだんをするものよよきとたればいまこよよびよせなりわがみゆめのよほどふいぎなるゆめなればなんぢよくかんがへてはんだんせよとまうました。そのときよせふのこたへまするのこれのわたくしのちからではんだんすることでのござりませぬたにかみさまのおんまらせよよりていたすことでのござりますあなたゆめをおはな—あらばすぐさまかみさまのおんみちびきよよりてわたくしはんだんをいた—ま—よふとまう—ました。わうさまのすなはちう—とこくもつのゆめのことをこまかよはな—ました。よせふのまばらくかんがへてこれのふたつともよほどだいのわけにてそのまらひきのこえたら—

とまちはんのこへたこくもつにまちなんのあいだほうねんのあるま
 ーにてそのあいだにこくがよくだまよふ。まかーそのつぎのまぢひ
 きのやせたるうーとまちはんのやせたこくもつにまちなんのあいだだ
 いきふんのあるまーにてそのあいだになにひとつできるものいござり
 ますまひ。これにまつたくかみさまのおつげにていまよりまちなんのあ
 いだにたいそうなほうねんがつきますがそののちのまちなんまへ
 のほうねんよかつほどのだいきふんがあるとおんまらせゆゑまへ
 まちなんさくもつがよくみりまするうちまたくさんのたくはへをいた
 ーのちまちなんのきふんよそなへねばかならずこまることごまいりよ
 ふ。なにぞどはやくくらをたてよきひとをゑらみてそのことをつかさど
 らせのちまちなんのきふんのときひとのおほくまなぬやりなざるがよ
 ろうござりますと。いとまんせつよつげまいたればわうさまをはじめおほ

くのけらしいもよせふがねんごろなるをへをよろこびすておくべきこと
ならねばさつそくよせふよこれらのことをすべてつかさどるやうよまう
つけわうさまのじぶんのでよりゆびわをはづしてよせふのでよはめ。ま
たうつくしききものをあたへそのほかくびかざりばやなどよいたるまで
みなよせふのころまかせよつかふやうよいたそのうへよせふよあふ
ときいたれよかざらずかいらをちよつけれいをせよとまろつけよせ
ふにはかよたふときみとなりまいた。よせふのかくさかえたふとまれま
いたれどすこもおどるころなくあそびやのみくひなどよひとつもふ
けることなくまねんのあいだくにのうちをあちらこちらとばやに
てのりまはこくもつをかひあつめどころぐよくらをたてそのうちよ
ごくるいをいつばいつみいれきよんのそなへをどこのへまいた。よせふの
ちうやかみさまよいのりをあげかつまたわがみのさいはひよなりたる

おんれいをつねよのべまいたがよせふのころよいきれいなるきものをきたりよきものをわがものとえてたのいむことなどをよろこぶのでなく。こくもつをたくはへてきんをすくふことのできるやうよなりましたことをきつうよろこびました。かくまわはせのみとなりてつをむかへふたりまで こともがでまいたれどどかくにもこのことごころよかよりちこのごろいかになされやおとろべにみんもさだめてせいちやうたであらふがまたもやわがやうよきやうだいたちよいためられいせぬかといろくころをいためつなグのつきひをおくりてをりまいた。よせふがかくとほさくにへまいたことのみなきやうだいのあくるんよりおこりまいたことなれどこれもまことのかみさまのみごころありてなされること。かつまたごくのたくはへとえてきんよくるいむひとぐをすくふことのできるのもまつたくかみさまのおさづにてふ

かきおんめぐみでありました。それゆゑきやうだいのこゝろよりおこりまゝ
たこののやうよみゆれどもなかくきやうだいのわざでいありませぬ。
さればやまひやくるゝひことがありましてもそれのみなかみさまのお
ぼゝめゝにてなされることゆゑいまそのみがいろゝのくるゝみなんぎ
よあふことありともものちよゝそのわけをいちゝよこゝろよととると
きがござりまゝよふ

〔第十六章〕

ゑじふどのたふときひとよせふのこと 創世記第四十二章

ゑじふどのくにいはたてわうさまのゆめまたがはずまへまぢねんのほ
うねんののちのどいぐきんぐついましたゆゑひとぐおほきようれ
ひたべものをかふことよつきていかいせんとかんがへましたこれ
をまのぐまかたもなきゆゑひとぐつれだちみやこのわうさまよあはれ

みをねがひたひといづれもくちぐゝまなんぎなることをのべました。その
 ときわうさまのひとぐゝまむかひかねてこのことがあらふとおもふゆゑ
 けらいよせふまうつけきんのだくはへをじろぶんまそなへたるゆゑ
 なんぢらによせふのところへゆきすくひをもとめてかへるべいとさど
 まられた。いづれもわうさまのことがまたがひいそぎよせふのもど
 へゆきまかぐのこをまうまられた。よせふのくらのをひらきつ
 みたくはへたるこくもつをそのひとぐゝまりあたへました。いづれもす
 こーのかねをもつておほくのこくもつまかへられることをよろこびれい
 をのべてかへりました。このことがほかくのくにへもきこえました。もの
 ゆゑおほくのひとがむれをなめいゝふくろをせなかませあふたり
 てよもちたりきてわれもくとたえずおとよまいりました。そのう
 ちよじふにんづれのひとむれがめいゝかねとふくろをもちこれらも

こくもつをかふためよせふのもとへまいりました。これのほかのひと
でいなくすなはちよせふのきやうだいにてすぎーころよせふがちくのい
ひつけをうけてきやうだいのみまひよまいりましたときそのまゝとらへて
るじぶどのあきんどよじうまいのぎんよりうりつけたるわーきひとたちであ
りました。もはやいまよりにじうねんまへのことなれどよせふのよくきや
うだいのかほかたちをおぼえてすこーもわすれずよをりましたゆゑいまの
いかやうよも去てまへのへんばうをかへすこと、じゆうなれどもよせふ
のなか／＼さやうなことなど、すこーもせずたゞひとどほりよつきあふ
てぬまーたれば、かれらもこれがよせふといゆめよも去らずるじぶどの
おもきおやくにんだとおもふてをりました。さてもよせふのいまきやうだい
たちがあたまをちよつけていねいよじぎするふりをながめながらじぶ
んのまだをさなきときさたばねのゆめをみーことをおもひだーじぎせー

たばげんよいまわがまへよあるこのきやうだいのことであるをかみ
さまのおまらせなされたものなりとふかくかんじてさつそくよかれらが
さまのつみをもゆるいちよもべにあみんよもあふことのできるやり
よどりはからひたくおもひーがまたもまばーかんがへてかれらにいまなせ
ーつみをくひあらためてをるかくひあらためてをらぬかこころみようと
おもひ。たちまちこゑをあらうげてなんぢらにいづくよりきたものなるか
といかりのかほにてたづねまいた。かれらにこたへてかなんよりこくも
つをかひよまいりまいたものであるとやうーまいたよせふのいひまする
よなんぢらにまさーくてきのまのびものにてこのくによこくもつのな
きをまりへいたいをもつてわがどちをせめとるためよあんないするも
のであらふとやうーまいたればかれらこたへていひまするにけつーてさや
うのものでいござりませぬわたくーどもにまづーきじうにんきやうだいに

てうへじよするをおほきようれひこくもつをかひたいとぞんじてまいりま
した。よせふのきよてなほもまこととせずなんぢがいふことのみないつ
はりだとまうりまいたればかれらのますくおそれいりことばをそろへて
まうすよのもとのじうににんのきやうだいでありまいたがひとりのも
はや喜んでまひいまいひとりすゑのおとうとにてとよりやあたるとわれら
のちよとともまいへよのこりてをりまするそのとよりやおとうとがう
へじにきていよふびんゆゑこのたびとほきこのくにへこくもつをかひ
よまいりまいたそのほかよけつていつはりのまうりませぬといひまいた
そのときよせふのいひますよもーなんぢらのいふことがいつはりでなく
ばそのすゑのおとうともともよこへつれきたれわれのものをもみ
たくおもふなりとまうりまいた。それよつひていこよをるきやうだいじ
うにんのうちいちにんをかんなんむかひのためよつかはりのこりのも

のいべにあみんのくるまで ちやうやよいれてとめをくべーといひつけられ
かれら きやうだいたち たがひ よかほをみあはせてちやういにかあいとおとうと
べにあみんなれば 志ばーも そばをはなーい なざるまひ そのうへちよよん
われくをふあんーんよ おぼーめせば なにほどことばをつくすともけつー
てわれらのいふことをもちひていくだざるまひとおほきよたうわくい
たーまたが志かーいまさらせんかたなくいづれもちやうやよいれられまた。
このときかれら きやうだいたちいせんのつみをおもひだーいまかくな
んぎよであふのいすぐるころおとうとよせふをむむくとりあつかいまーた
あくじのむくいよさうぬなーとおほきよこうくのいしてをりまた。かくて
みつかたちまーたれば よせふのつかひがちやうやへきてかれら きやうだいの
まうすよんなんぢら おほせいとめおくもせんなきことなれば そのうちい
ちにんをのこーおきくにんのものにくにもとへかへすなり こくもつん

のぞみのごとくあたふべーはやくこれをもちかへりちよよあたへておどろどをいちにちもはやくつれきたれさすればのこのきやうだいをゆるしてこよよりいだすべー。わがいふとほりよおとうとこのところへつれてくるなればなんぢらのいひーことのみなまことなり。さすればのぞみのごとくすべてのこともよくはからふてつかはすべーとつけました。きやうだいのものわがやまかへるやうよなつたことのおほきよよろこべどもそのうちひとりいらうやのなかよのこらねばならぬよつひていまずくいせんのあくじをこらくない志よせふをうりてとれいとなせーむくいのみまめぐりきてこのやうよひとりいらうやよといまるもこれみなかみさまのなされることにていまさらかなーむも志かたのなひ。かみさまよいのるよりほかよみちのなひとまうしてゐました。さてまたあじぶととかなんとのことばがちがひますゆゑいつもよせふとはな一するとき

n つうべんをもつてはなりましたゆゑきやうだいどうーはなしまするときに
 かなんのことばにていふてもこのところのひとよわかるきづかいなから
 ふときやうだいnころとゆるーてかたりゐましたがよせふnうまれし
 くにのことばなればことぐくきとどりきやうだいらがつみをこうくにいす
 るをまじまばーなみだをなぐーましたが。じぶんのへやよいりなほこの
 りへちとをたいせつよいたいわがじつのおとうとべにあみんをまたいむ
 ころありやなきやいまひとつためてみようとへやよりいできたり。
 きやうだいのうちまめをんといふひとりをゑらみらうやよとめをきてあ
 ーをまかとなはでくすり。ほかのきやうだいらnゆるされてかへりみち
 よつさまいたよせふnかねてけらいよいひつけこくもつをたくさんふくろ
 よいれまたかれらがこくもつのだいよはらふておきたるかねもそのふく
 ろよいれさせきやうだいたちよわたー。まだそのほかだうちうのよういまた

べものをもあまたあたへました。はらひーかねもどもよわたへられーこ
とにころつかずくにんのさやうだいにいそぎわがくにへたちかへりゑじ
ぶどにていろくのくるーみよあひーことをいちくちよつげてまろ
ーまするまに。かのくにのおやくにんのわれくをかなんのまのびもの
とてきびくまかりなにはどまろーわけをましてもきよいれずとふく
まめとんをまばつてらろやよいれわれくがべにあみんをつれてゆくまで
のゆるさぬとまろされまーたとはじめからおはりまでをはなれまーたが。
やこぶりとーよつたみでこれらのかなーきはなーをきよそのろへかあいひ
べにあみんをとほきくにへつかはすことなをまきよなかくまようちする
けーさのみにませなんだ。このときさやうだいたちのこくもつのふくろを
ひらいてみまするよふーぎやそのなかよりゑじぶどにてこくもつのだい
よはらふたるかねのつよみでまーたゆるがてんゆるかすとまたはかの

ふくろをもひらいてみればいづれもおなじやうよきんすがいでまいたゆ
 ゑ。きやうだいのいろくといやうぎをたてゝかんぐへまいたがいつかうよ
 わからずもーやわれくぐふたゝびゑじぶとよゆきたるときこれらのこと
 をつみとまてらうよいれようとのたくみでいあるまいかとあんどてみれ
 ばおそろひことながらもーゆかぬならかのくによひとりまばられてのこ
 されたるまめをんころされるであらふーことよちのやこぶりなかく
 べにあみんをとほきくにへてばなすけーきりなーさすぐのきやうだいたち
 もいまいとはうよくれてをりまいた。そうこうするうちまたもこくもつが
 どばーくなりまいたゆゑきやうだいたちのちよままでなんぎをかけていな
 らぬとおもひべにあみんとつれてふたゝびゑじぶとよゆきまめをんのくる
 ーみをすくひそのうへこくもつをかふてきたきものことバをつくりて
 ちよねがひまいたれど。ちよのやこぶりかぶりをふりなんぢらにまへ

よよせふをうーないいまゝた^二志めをんを^一とほさくにはよおきそのうへわが
かあいひとおもふべにあみんをまたもつれゆきてこのとーよりたるものよ
志んばいをかけようとするか。たどへなんぢらがいふことよまたがひべに
あみんをやるどもそれよよつてかならず^二志めをんが^一ゆるさるゝよさうな
いともしはれまひからべにあみんをわがそばからはなすこといならぬと
まうーまーた。そこできやうだいたちのいづれもちからをおとーよぎなくか
なんよとゞまりまーたが^二志めをんひとりい^一ゑじぶとのらうやのうちよど
どめられいまよもたれどがべにあみんをつれてきてわがこのくるーみを
たすけてくれるかとまちくたびれてながのつきひをおくりまーたがおか
せーつみのまはりきてかくうきめよあふことときやうだいたがひよかた
りてくやみあひまーたありさまいこゝろからといひひながらあはれなこと
でござります

〔第十七章〕

よせふ きやうだいをもてなすこと 創世記第四十三章

さても きやうだいたちのちとやこぶまいろくとすめたれどもべにあみ
 んをはなさぬゆゑよぎなくかなんよといまりましたがつきひのたつよ
 きたがひてまたもやたべものぐすくなくなりましたゆゑちとのやこぶの
 きやうだいたちをよびまたくこくもつをかふためゑじぶとへゆけとまろ
 一つけました。そこで きやうだいたちのこたへまするよのかねてあなたよ
 まろーまーたとほりふたごびゑじぶとよまいるよのせひどもべにあみんを
 つれてゆかねばなりませぬも一つれぬなりおやくにんへこくもつをたのむ
 ことのできませぬとまろーまーた。やこぶのこのことをきいておほきよか
 なーみなせなんぢらのおとうのあることをかのひとよまろせーぞなん
 ぢらがいひさへせねばかくくるーさめよのあふまひものをやらねばき

んのくるーみありやればふたゝびかへるまいとくりかへてまうーまいた。
きやうだいたちのまうすよんかのひとのはじめよりいろくのこと
われくまたづねいまよてごのいきてをるかまたほかよきやうだい
あるかといとねんごろまたづねまいたゆゑかようなうきめよあふといま
らずなにごころなくありのまよまうーまいたがいまさらこうくのい
たーますとまうーまいた。このときやこぶすこーことからのようすをま
りまいたけれどもまだべにあみんをやることゆゆるすころがござりませな
んだそれゆゑきやうだいのうちのゆたといふひとがおもふよんかくて
のちゝのためよならずまたべにあみんとてもこくもつなよんをられぬ
こととおもひちよよすゝめていひますよんあなたがいよくきやうだい
のまうーますことよおまたがひなさるならわたくしがべよあみんにきをつ
けてたーかよつれてかへりまよふもつれてかへりませぬならそのつみ

をわたくしがうけまゝよふ。志かゝそれをもなほおゆるゝなされぬならわれ
らもべにあみんもども又志ぬよりほかひござりませぬとまうゝました。こ
のときやこぶもすこゝのわけがわかりやうやくゆるすことをいたゝべ
にあみんをゆたゝわたくしまたがなほも急じぶこのことをなにくれとな
くおもひまはしてももきんすをぬすみーなどといはれてまたこどもら
がきめ又あひのせぬかとそれらのためみやげものをとりそろへかれら
がつくりくるみ、はだんきやう、さんせう、もつやく、こせう、はちみつ、その
ほかくのさんぶつといろくともたしてやりました。よりたるみ
をもちてこどものことまかくたびく志んばい又あひいまにかみさまの
おんまへよこのゆくすゑをめぐみたまへといのりを志てなごりをい
もべにあみん又わかれました。さてきやうだいらいこのまへ志らずももち
かへりたるつとみのかねとみやげものとふくろなどをろばのせなかよ

くさりつけちととじぶんたちのつまこよわかれをつけてゑじぶどのかた
をさしてゆきまゐた。きやうだいらいのみちすがらもかのつぐみのかねよつ
きぬすびどなどといはれてうきめよわひのせまいかとまんばいまながら
たびをきてはやゑじぶどよつきまゐたゆゑすぐさまよせふのところよゆ
きすゑのおどうどをつれてまゐりまゐたといひまゐたらよせふのどるもの
もとりあえずいそぎてべにわみんよわひまゐた。よせふのすこいおもかげを
おぼえてゐまゐたがべにわみんのこれがなさけふかきわがじつのあにと
のゆめよもまらさひたすらていねいよあいさつをきてをりまゐた。そのど
きよせふのけらいとよびこのじふにんのひとをわがいへよまねきてひ
るはんとさゝあぐべいとまうつけまたらうやよりまめをんをいだいて
どもよあんないをさせまゐたがきやうだいらいのそのわけをまらざればま
もべよどもなはれてゆくをおほひよおそれまたもさきのかねのことよ

つきいかなるくるしみをみるこどやとたがいよきんばいきてまいりまいた
 ゆゑかれらによせふのけらいをそつとよびわれくがこのまへまいりま
 したときふくろのなかよかねづつみのあるのもきらずもちかへりま
 たゆゑはなはだきんばいいいたしてもいやわれらがこのくににてぬすみ一な
 どとおんうたがひをかうむりのせぬかとおほいよおそれてをりますれば
 なにとぞあなたのおどりなりにてぶなんよくにもとへかへるやうよな
 されてわれらのとよりたるちよよあんんをさせてくだされませとまう
 一まいたればそのけらいがこたへていひますよそのかねのこどもつき
 てにおこころづかひなざるよにおよびせぬそれにつたくあなたがた
 ならびよあなたのおちよさまがつねよおいのりなざるかみさまがなされた
 こどもちがひにありませぬとこたへながらひるのよせんをすよめまいた。
 きやうだいらにらうやよいれられぬのみならずきんばいきていたかねのこ

どもせめられるやうすもなくいせんよかはるもてな一をうけふ一ぎよお
もふておそる一せきよつきよせふのくるのをもちてをりまいた。そのと
きまもべのみづなをもちきたりてきやうだいらのあ一をあらふてをり
ますうちよせふのほどなくそのところへまいりまいたゆゑかれらどもにあ
たまをちよつけみやげものをさ一いだてをりまいたが。これこそいせん
よせふがゆめよじふいちにんのきやうだいがよせふのまへよひれふ一
ておじぎするといふかのいねのたばのゆめよすこ一もちがはぬときが
きま一たのでござりますそのときよせふのいせんよかはりいとまんせつよ
ていねいなることばをもつておまへがたのちよさまのいまよごきげんよ
ろ一きやとよひま一たら。きやうだいらのつよ一みてまだいきながらへてを
りますとこたへま一た。よせふのそのバをみまは一べにあみんをみるより
いだきつきたがひよよろこびたの一みたくのおもへどもさあらぬふりまて

おまへがたのさきよおはな—なされたおとうとこのこのことであり
 ますかといふよ。きやうだいらいこたへてさようでござりますときよてよ
 せふのながるとなみだをどいめかねわがへやへは—りゆきまば—の無い
 てをりま—た。このべにあみんばかりをほかのきやうだいよりよせふがた
 いせつよまてかくあいするゆゑいらけるといふはよおやのはらよりうま
 れたにく—んのきやうだいにてほかのきやうだいたちのはらぐりのもの
 なればませんよおんあいのふかきとあささとのちがいがありまするの
 でござります。よせふのひとりころよおもふやうわれとべにあみんのは
 かのきやうだいといはらがはりにていまさいはひよまてこのみぶんとな
 りたれどもむか—のかれらのためようられたるほどなればべにあみんも
 さだめ—かれらよりうきめよあひなんぎまてをるであらふとおもひのほ
 かきげんよきかほをみたるをよろこび。やうやくなみだをおさへきやうだ

いたちよひるごせんをあたへようとたちあがりそのさーきをみつよまき
りひとつひよせふのやくにんひとつひぶんのこりのいまひとつひきや
うだいたちのためよそなへ。それよりさーづまてきやうだいたちをどー
じゆんよすはらせままいよんべにあみんをすはらせまいたがきやうだいたち
いたがひよころのうちよよくもわれくのどーをこのおんやくにん
のまつてござるとふーぎなかほをまてをりまいた。よせふのうまいものを
はちさらよりとりきやうだいらよあたへわけてべにあみんよんべつよこ
ろをもちひせわをいたーまいたがかれらきやうだいもあくまでごちそう
よあふたごをよろこびながのたびぢのつかれもわすれいまいおどうど
をねたみにくむころもなくともよころよくたべてをりまいた。せんね
んよせふをあなよいれすでよころさふとまでまたものをかくねんごろ
よめぐみをもつてうらみよむくうよせふのころのありがたい。これこ

そてうどこののちよいゑすきりすどがよのひとよにくまれながらそのものをたすけようとのおんちかひをなされーこととひとつこのころでござりまーよふ。これみなむかーのことなれどどなたもむかーのはなーとせずわがみよこのことをおこなふてめぐみをうらみよむくふこそこのうへもなきさいはひのたねをまくのとおばーめーできぬところをたえまのびあくまよかつがだいいちのつとめでござりませ

〔第十八章〕

よせふきやうだいをゆるすこと 創世記第四十四章

さてもきやうだいたちのよせふのこちそうをうけてよろこびまいたがそのよのひとばんそこよとまりあくるあさはやくおきてよせふよいとまをつげまいた。よせふのむりよといめもせずかれらのふくろよこくもつをつめさせまたそのなかよかねづつみをもいれさせべにあみんのふくろよ

のべつよぎんのさかづきをいれさせてそのふくろをめぐりよわたりま
した。それどもおらぬきやうだいたちのたいこくもつばかりとおもひめい
めいてよもちまたるばよものせてでかけまいたが。このたびこそきやう
だいのこらすつれだちてかへるやうよなりたるをよろこびたがひよはな
をまながらはやくくにへかへつてちよをよろこばせやうといそぎてみちを
ゆきまいた。このときよせふのまもべのあとよりおいかけてまいりきやうだ
いたちをひきどめていひますよのわがだんなのおまへたちをかくべつま
せつよおとりあつかいなさるのよなにゆゑおまへたちそのをんをわす
れだんながにちくさけをめぐらざるぎんのさかづきをぬすんだかをん
をもおらぬつみびどだとまうまいた。きやうだいたちのびつくりいた
わたくしどもそのやうなあくじをするものでござりませぬそのまや
うこよこのまへふくろのなかよいてあつたかねづつみをもおかへ

「もうすぐらぬのことゆゑなかくぬすみなどするものでござりませぬそれにかならずまぢがひでござりまゝよふもいもわたくいどものうちぬすんだものがあるならばそのものをころしてほかのものにせれいよされてもうらみのござりませぬとまうしても志もべになかくきよいれず。それならばいちくふくろのうちをあらためやうとてきやうだいのだいじゆんまたんくとあらためまいたがどのうちもさかづきのありませぬゆゑみなくあんーん志てをるといちばんすへのべにあみんのふくろのそこからそのさかづきがいでました。きやうだいたちのびつくり志て志ばらくものをもちひませなんだがそのとき志もべのいひますよこのさかづきをぬすんだものいまよりつれかへりてわがだんなよつかへさすほどよおまへらのかつてよくにへかへりなされとまうまいた。きやうだいたちにおほきよこまりいまさらべにあみんをひとりのかうてくにへかへらば

ちよのまへよいひわけたすといづれもかなしみながら志もべといつゝ
よもまたくよせふのところへまいりまゐた。よせふのいへよまぢかまへ
てとりまゐたがきやうだいたちがべにあみんとともよなくくもどつてま
いるをみほかのきやうだいたちがおとうとべにあみんをあいしてとること
を志りまゐた。なれどもよせふのわざとはらだちがほにてあらしこゑで
なんぢらのいかなるあしきことをせいやとまうりまゐたゆだのかねてよ
りべにあみんのことをひきうけてきまゐたゆゑよせふのまへへすすみ
いでもはやかくなりてのいかほとべにあみんがとらぬといひわけ志ても
むだなりとおもひたゞめぐみよよりてかれをおゆるしただされとひたす
らねがひまたとふぞきやうだいのものこらすとれいとおなりただされと
まうりまゐた志かよせふのさかづきをぬすみものだけとれいとなり
ほかのものにくにへかへれとまうりまゐたゆだのふたゝびすすみいで

舊約聖書の話第十八章 ヨセフ 兄弟をゆるす事 九十八

よせふよむかひまうゝますよひなにとぞまばらくのあいだわたくしのおろ
しあげることをおんきくくださりませ。はじめおたくしどもがこくもつを
かふためよこのちへまいりまうたときあなたにわれらよきやうだいがい
くたりあるとおたづねなざりまうたゆゑいまこよよあるきやうだいのほ
かよいちにんくにもとのちよのそばをはなれずよをりますものがあり
ますがべにあみんとまうすなでござりますとまうゝまうたればあなたにそ
のものをつれてこよとおほせられまうたゆゑくにへかへりてちよよその
ことをまうゝまうたれどなかくきくいれるやうすもなくすでよいちにん
にせんねんまゝかくまかよひころされていまよかへらずあのたいせつ
なることをうゝなひたればいままたこのべにあみんをつかはすことゆゆる
されぬとまうゝまするをいろくときすくめまうてやうやくつれてまいり
まうたをまたよとめられてどれいよされむなくわれくがかへります

ならばちよひかならず志にまゝよふ。われくゝのちよひのかなゝみをみての
をれませぬゆゑよなにとぞわたくしをどれいと志てべにあみんをおたす
けくださりませとくりかへてねがいまゐた。よせふのさきはどよりかれら
のやうすをくはしくみるよちよをあいおどろとをまもるころの志
んせつなるを志りてめよもつなみだをこらえかねそのばよゐあはすゑ
じぶとじんをほかのところへおいやりそのあとにてこゑをはりあげて
たほるよばかりよなきまゐた。志ばらく志てよせふのあたまをあげいまの
なにをかかくしよふわたくしあなたがたのきやうだいよせふでござ
りますとあまりのことよきやうだいたちのいづれもうたがふてちかよらぬ
をよせふのそびよはりよりかれらよだきついていひまするよのいせん
わたくしをおうりなされたことあれがさだめそれらのおきづかひがあ
りまゝよふがそれらのことをいまさらとがめぬ志ませぬゆゑであんゝんな

されませそてこれらのことにかみさまのおぼしめありてなされたこと
なれやくやむべきことでのござりませぬ。かみさまがきんこのうれひをす
くひあなたがたのいのちをたすくるためさきよわたくしをこのあじぶとへ
おみちびきなされたことよちがひなり。さればちよもろどもきやうだい
つまこをひきつれてこよいつよよすまひするやういたうたければはや
くかへりてちよよつげこのあじぶとのきれいなるみやこのことをお
らせまうてわたくしのころのほどもおつげくだされとまうました。
またおとりのべにあみんをいはりたがひよてをとりくちつけをきて
よろこびました。がほかのきやうだいたちこのときはじめてまことのよせ
ふであることをきりまたまへのつみをゆるされたことをうれしくおも
ひころおきなくはなをいたうました。これらのよせふのふるまひにか
みさまのみどころよよくかなひますかみさまいたとへあくじをいたうたも

のでもひとたびくいてあらたむればさいはひをおあたへなさることです
ります

〔第十九章〕

よせふちちよあふこと

創世記自第四十五章

よせふきやうだいたちよじぶんのことをうちわけてこれまでよありこ
とをはなそうとおもひけらいまもべをそとへだいなかくときをうつ
てものがたりをいたしましたがこのときよあじふとのわうさまもよせふ
のきやうだいがこのころこのちよきてをるときよともによろこび。よせ
ふをよびなんぢがちちやきやうだいのつまとこどももみなこのちへ
きてともよすまひをするがよいむかひのためよばいやそのはかいりや
うのまなぐのなになににてもとくのへつかはそうとまんせつよまうされま
した。よせふのすぐさまそのことばよまたがひひとりまへよふたかさねづ

つのきものをやりまたがどりわけべにあみんよのおほくあたへやがて
 たびのまたくもどのひまーたゆゑきやうだいちちよちちよをむかへておい
 でなされとまうーてかへらせまーた。このたびのいままでのたびとちがひ
 くるまやうまやそのほかまたくさんのにもつをろばのせなかまおはせ
 てゆるくとたびだちをいたーまーたがころよきたびをまてさぞうれ
 ーうぶざりまーたらう。さてまたちちのやこぶのわがいへまのこりてべに
 あみんのことをまんばいまながのつきひをさびくおくりころをいた
 めてをりまーたがさいはひこよまどきをえてこぞもらののこらずかぞぐ
 ちよりちちへよたいまかへりまーたといふこゑをきてやこぶのお
 はきよろこびむかひいでてあひまーた。それよりまてこぞもらのよせふ
 のはなーをはじめまーたがやこぶのちくいちよきてふーぎよおもひよ
 せふのせんねんまんだよちがひなきいままたあじぶとよゐてたうどき

ひとよなつたとりさてもがてんのゆかぬことだといふてをりまいたが
こどもらのだんぐくくいーくかたるをきくかつまたむかひのためよろま
くるまそのほかおほくのおくりものもありませんがこれらをみたりき
たりまてやうくこどもらのいふことよまたがひゑじぶとよゆきよせふ
よあふころよなりまいた。それゆゑきやうだいたちのつひよかなんをは
なれやこぶをはじめおほくのむすことそのつまやまごなどすべてあ
よはなるものをくるまよのせゑじぶとをさしてゆきまいた。よせふのよは
やきやうだいたちがちよやこどもやつまをつれこのちよくるであらふ
とむかひのためよばーやよのりみやこはづれのところまでまいりてをり
まいたがてらどそのときむかふよりばーやよのつてくるののまさーくわ
がちよときやうだいなればますますよろこんではーりまいたやこぶもいま
のうれーさのあまりくるまををりよはきあーにてよせふのそばよすりよ

りおやこたがいよいだきつきこゑをあげひこのみるめもかまはずよなき
 さげびてよろこびました。やうくやこぶのなきやめてなんぢのこのよ
 なきものとおもひのほかよけふのたいめんもはやわれのいつまぬとも
 このよよおもひののこらじとくりかへてのよろこびぬました。よせふの
 このことをわうさまよまうあげようとはりゆききやうだいのうちご
 にんをたづさへわうのまへよひざまづきていねひなるあいさつをまました
 が。わうさまもよせふのよろこびをさついろくのはなりのついでよ
 きやうだいらよなんぢのいとむわざありやとたづねました。そのときか
 れらのつとみておこたへまうすよの^{||}かなんよおひていままでのう^{||}や
 ひつじをかふてをりましたが^{||}かなんのあをくさよともく去ておもふや
 うよせいちやういたせせぬとまうあげましたれば。わうさまのふたごび
 かれらよおほせられますよさらばよさちをなんぢらよあたへようどてあを

くさきげりーひろきのばらをおほくあたへられました。そののちよせふのち
ちをもなひわうさまのまへよまいりますればわうさまのたいせつなるよせ
ふのちよなればはなはだうやまひかくべつとりあつかひよころをおつ
けなされました。やこぶのわがてをわうさまのおつむりのうへよおきか
みさまよいのりをいたしました。このときやこぶのどーのひやくさんじふ
よもなりーことゆるわうさまのそのながいきをおいはひなされーよや
こぶわうさまよまうーあげますよのわれらのせんぞのいとながさいのち
をうけながくこのよよをりましたがわたくーのころよかなーみのたえ
るひまのござりませぬゆるこのうへおほくのどーのとれませぬとまうー
ました。さてもやこぶのわうさまよりあたへられーくさおほきところよむ
すこやよめとともよすまひをいたしてをりましたがよせふのやはりみや
こよといまりわりのそばよつかへゐてときくいとまあるときのちよ

のもどへみまひよゆきかうくよいたしてをりまいたされバやこぶいよ
いよみもよはりあもかなはずめもみえずなりたればもはや去ぬるよ
ちかーとかくご去てこやまごのためかみさまよいのりをなーまたゆい
ごんをもなーおかふとおほくのこをバねどころのそばまでよびよせ
いちくよそのなをよびていひますよわれもはや去ぬるとおもふゆゑ
わが去せーあど去がいをバもちかへりぢいあぶらはむちういさくのはか
のなかへうづめよといひおはりてねむるやうよ去にまいたがよせふの
なげきひとかたならずそのなきがらよどりすがりこゑはりあげてかなーみ
まーたがあどよのこりーきやうだいらいもともよなげきまたへどもはやこ
ときれーのちなればいかよどもせんかたなくゆいごんごふりよかなんへ
ゆきそうれいをいとなまんどそのことをひとぐよつげーよよりたつと
きやくにんをはじめおほくのひとぐかなんまでおくりーことなればまこ

とよにぎやかよはふむりをいたしふたしびるじぶとよかへりました。きやう
だいらのまたもひとつのうれいをおこしたがいよよつてはなすまよお
とうとよせふがわれくのつみをゆるしいままでらくよくらさせしんま
つたくおひたるちよあるゆるいまわれらのつみをたしいかなるうき
めよあふかも忘れずとつひよつかひをよせふのもとよつかはしちよ
がこのよをさりしとてわれらのつみのおゆるしくだされとまりさせた
れび。よせふのこれらのねがいをきしわがまんせつのたらざるゆるかやう
よわれをうたがふことであらふとおもひました。このときよせふのきやう
だいらもよせふのまへよきたりかしらよをさげさもおそろしげよあやまる
やうすをみてよせふのきやうだいらよむかひこのわたくしよたいしてさほ
どおそろしよのおよびませぬ。むかしわがみをうられしあきことなが
らこれみなかみさまがかなんよゐるわれらのまんぞくをきよんのくるし

みよりすくふおころありてなさりーことなればかならずまねばいまたまふなとかれらのころをなぐさめまーた。さてつきひもたちとーもつもりよせふのとーもひやくじつさいまなりからだもよほどよはりはてもはやこのよまたのみすくなくなりまーた。ゆゑわがこともやきやうだいのこともなせよびよせていひますよ。われらのまそんをかならずかなんのちよすまはすとかねてかみさまのおんやくそくあればいつかかのちよいたるときがあるべーそのときわがかばねをもちかへりちよやぢいのはかのうちへはふむりくれよといとねんころよいひおいてつひよかへらぬたびよおもむきまーた。こののちおよそにひやくねんばかりたちますとかみさまのおんやくそくよふりよやこぶのまそんがかなんへいたるやうよなされーときゆひごんのとふりよせふのかばねをもちかへりせんだのはかよあらためてはふむりをいたーまーた。よせふのきやうだいらのつみをゆる

かくていねいといたーまーたのじぶんのつみをかみさまのおゆるーな
さるをありがたくおもふゆへでござります。これかみさまのみどころよか
なふことにてわれらもつねまかくあらねばなりませぬ。さすればまたよせふ
のよふまかみさまのかならずおんたすけなさるまぢがいござりませぬ。さ
てもかみさまのおんやくそくまあぶらはむ、いさく、やくぶをあいーたまう
てなんぢのまそんのかならずかなんますまのすとおほせられーことばま
たがはずつひまこののちやくぶのまそんのかなんへすまふこととなりま
した。まほこれよりもたふときおんやくそくま。このまそんのうちま
せかいのひどのつみまかはりこのよのくるーみをひとりにてひきうけ
かまになさるすくひぬーをいだーこれをまんじそのをーへままたがふも
のりかならずすくはるまとのおんつげがござりました。これこそわれらの
ためまおーになされーいゑすきりすとのおんことでござりますまなたも

おのれのつみのふかきをさとりいゑすきりすとのあがなひをたのみてたのいきてんこくよすまふことをおねがいなされ。さすればかみさまをまじまいたあべる、のあ、あぶらはむ、いさく、やこぶ、よせふともろともよいつまでもたのしくすまふことをかみさまにおゆるいなさります

〔第二十章〕

もうせのこと

出埃及記第一章

そののちよせふのこともやまごまたりのきやうだいのこともらもかなんへのかへらすやはりゑじぶとよすまひいたーまいたゆるゑまそんまたいよふえさかえまいたがのちよこのひとぐをさしていすらへるびとととなへまいた。これのやこぶがいまだこのよまながらへーときかみさまよりいすらへるといふなをもらひうけーよよりかくやこぶのまそんもいすらへるひととまうたのでござります。さてこのいすらへるびとにすべてゑじ

ふどのちよすみひつじをかひてなりはひとなりばるといへるこくわう
のせわをうけみなあんらくよくらまいたがつひよこのわうさまもま
そのくらひをつぎわうさまのやはりばるといひました。このわうさまが
かんがへますよのわがくによをるいすらへるのまそんなはるぐとどほ
きくによりきたものなればかくまそんがはびこりてのゆくわがくに
のためよならずかへつてくにをほろぼすもはかられずはやくかれらをな
きものよーわざはひのもとをたつがよかるべとわるきたくみをお
もひつきかのひとぐをよびせいひますよこのたびたかきへいをつく
るゆゑそのためなんぢらあかがはらをつくりいだせよとまうつけました
がこのこといすらへるびのためよはなはだむつかしきことでござり
ます。なせとまうすよこれまでひろきすくさのばらでひつじをかふて
をりまいたよそれよひさかへつちをあなよりほりいだあつきひなたで

ほ—かためるのみならずも—もまごどよかたればやくにんきたりてうちた
 たきますことなればあはれよもひとぐ—のなみだのかはくひま—ござりま
 せなんだがば—のなほいすらへる—のよくまごどよまたえまのびてはた
 らくありまをみておもふよいまだこればかりで—かれらをほろぼす
 ことむつか—ひとおもひあはれよもかれらのうちをどこのこがうまれま
 すなれば—のこらずないるといふかはよまづめてころすべ—といひつけま—
 た。かくむごきいひつけをいた—たわけ—をどこさへ—ころ—ますればい
 すらへる—びどよいくさなどするものがなくなるためよいた—たのでご
 ざります。このおきてのいで—のち—をどこのこがうまれさへすればわう
 さまのけらいがた—ちよどらへゆきいち—く—ないるがはよなげいれてこ
 ろ—ました。まかるよこのいすらへるびどのなかよひとりのた—きをん
 なあり—がたま—く—をどこのこをうみおど—やれうれ—やとおもへばか



パロの女摩西を拾ひあげたる

のないるがはよなげこまれるかとまたおほいよかなーみひたすらかみさま
よおねがひまうーなにどぞこのことをおんたすけくだされとにちやいのり
をなーやくにんのまらぬやうよあちちこちらよかくーおきやーなひそだ
ててをりまーたがすでよみつきもたちまーたゆゑいまいかくすよどころ
もなくさりとてころすよまのびかねかほのはどりよはへてあるあーを
とりてかごをつくりそのあはせめよまつやにをぬりみづのはいらぬやう
よまてそのなかへあかごをねさせひとめをまのびいださもちかわのは
どりへはへまげりたるあーのあいだようかべおきどうぞこのことをたすけ
たまへとかみさまよいのりをなーなとりおーくもなみだをおさへわがい
へよかへることいなかへりまーたがまだなんとなくころよかゝればあね
むすめをよびてなんぢいかはのはどりよゆきひとめなきどころよりまの
びやかよをさなごのゆくすゑをみといけよといひつけいそがーたててつか

は—ました。むすめのはこのことばよ。またがひすぐさまかはのほどりよき
 てみまひすときよ。わうさまのむすめがおほくのをんなをともよつれあ
 つさを志のぐためかはみづよ。からだをひやそふとてかはちかくすくみさ
 てかはのほどりよ。ちかづきよ。そのかはなかよ。きれいなかごよ。わかご
 をいれておいてあるをみつけないまよ。みづよ。たゞよひてなぐれゆくを
 ふびんとおもひこ。もどらよ。いひつけてひらひわけてよくみればいともか
 あいらしきをこのこでござりました。これの中たくいすらへるびこのこと
 もにてわがちこのいひつけをまもりやむをえずかくはからひ。ことなり
 んとあはれみのころをおこ。ちよ。かくしてこのことをぞだて。このあ
 はれなるありさまをすくふてやりたいとつひよつれてかへるよ。ふすを
 ばそばよ。かくれてみてゐたり。むすめのおひめさまのそばへは。りきた
 りてあなたさまの。このわかごをおそだて。なさるおぼ。め。なれば。さだ

めてちうあるをんなをおかへなさるでござりませよふさいはひいすらへる
びどのうちまうばなるものがござりませればこのものをよびよせま
よふかとまうまいたればおひめさまのおほいよろこびはやくそのもの
をよびよせよとのことばもむすめにいそぎはるのそばもゆきこのこと
をはなれまいたればはるのいのりありてわがこそをそだてるやうな
なされこのれみなかみさまのおじひなりとよろこびいさみはりきたり
おひめさまのまへいでおめへまふまいたればおひめさまこの
このらみのはるといゝおぼやうばとなりてそだてさせまいたがつきひの
たつよまたがひてからだもよほどおほきくなりちるもつきおぼえもつよ
くなりまいたゆゑはるのまいにちかみさまのおんめぐみのはなをきか
してよくそだてゝおまいたが。おひめさままたこのこのおほきくなり
をきくわがひざもとへよびよせてじぶんのむすことなりつひにそのな

をもうせとよびましたこのなのわけのみづのうちよりすくひあげられ
 といふいみでござります。このおひめさまのわうさまのむすめゆゑきれ
 なるいへよおすみなされてまためいつかひのひともあまたあるみぶんゆ
 ゑよきひとをのみゑらみてもうせの志いやうとなりてんもんぐくやらそ
 のほかのまなぶべきことをみらさずをへましたゆゑかこきひととい
 なりました。たゞそのうちでかみさまのきよきおみちををへるものが
 ござりませなんだがもうせのをさなきときよりこのことをはくおやよりき
 くておりましたゆゑよくもかみさまをぞんじてをへましたそれでこそ
 ゑじぶとよのわたのがくいややものりあれどもひとりもまことのか
 みさまのことをまじりものとしてあることなければもうせよすぐれて
 みえるものゝござりませなんだ

〔第廿一章〕

もうせゑじぶとをたちのくこと

出埃及記第二章

もうせいのわろさまのこてんよすみなにひとつもふじゆうなくくらせーが
わがまゐるいのもののみなわろさまのためよくるーめられよるひるのわ
かちもなくきびーくつかはれてゐるをみるよまのびすなにとぞかれらを
たすけたいといろくこころをくるーめてゐるうちあるひかれらのはたら
ひてゐるところへゆきてみればいづれもねばつちをこねかはらをつくり
まばらくもやすむひまなくおひつかはれてをりまーたのうせいのふびんの
こころがまーてかねてよりかみさまのおんやくそくよいすらへるのひと
びどのかならずよさくによすまはすとあぶらはむよもおほせありーよな
にゆゑよかくむごきめよあふことならんとおもふてじつよこころをい
ためてをりまーたがわろさまのせめのひいよつよくだんくまごどをむ

つかいくなりそのことができねばやくにんがむちをもつてかれらをうちたゝきすでもころすばかりよつかふをもうせのいよくみるよたえかねそのやくにんをひとなさところにてうちころしひそかよあなようづめおきまたもあくるひ志ごとばよきたりてはたらくありさまをみておりがいかなるわけかいますらへるのひとせりーがなにかあらそひをるをみてひとりのむりをいふものよいろくいひきかせまいたればかれのもうせよむかつておほいよいかりなんぢのわらさまのやくにんよあらずなにゆゑわれらのさいばんをするぞすでもなんぢのきのふやくにんをころせーやうよいままたわれをころすかとまうしまいたればもうせのおどろいておもふよわがひそかよなせーことがはやくもかれらよさめられたればこのことがわらさまよ失れなばわらさまのきびくせんぎするならんもはやこのちをのぐれねばたすかるみちあるまじとおもひひそかよえじぶどの

みやこを志のびいでとほきくにへのがれまいたがいかよも志ていすらへ
るびどのくるいみをたすけたいとおもふてじせつをまちてをりまいた。か
くもうせのきれいなるところをふりすてなんぎ志てもいすらへるびどを
たすけたいとおもふころのふかくかみさまのみころよかなひたればつ
ねよかみさままもられてをりまいたのい志すきりすといてんこくのおんく
らいよりこのよよおくだりなされてこのよのひとくをすくひたいとお
ぼしめてごじぶんよいたくくるいみをおうけなされたがもうせもいす
らへるびどのためよいろくなるなんぎよあひすすことちあうどおな
じころでござります

〔第廿二章〕

もうせかみさまのおんつげをうけること 出埃及記第三四章

さてもうせの志らぬくにへにげゆきてあをくさおほきのよきたりゐどの

あるをさいはひまたびのつかれをやすめんとしてそのそばへよりみづを
のみてをりまゝたところへ。まちにんづれのむすめがおのくひつじをつ
れきたりてこのぬどのみづをのまさとまゝたときほかのひつじかひ
がまゝてそのむすめをおひのけじぶんのひつじばかりまのまゝさうとい
たすのをみてもうせのまことまふびんまおもひ。むすめをたすけてかの
あしきをとこをおひのけまゝてひつじまみづをあたへるせはまでいたま
したればむすめのよろこびおほかたならずわがやまかへりちまむかひ
このまんせつのことどもをつげまゝたまよりちままたこのことをき
ひてはなはだよろこびはやくそのひとをよびきたれわれもおれいをまう
さりとまたもむすめをつかはしまゝたゆゑもうせむかひまどもなはれ
そのいへまきたりちまあひまゝたればちまもうせまむかひけふにい
つよりもはやくむすめたちがかへりまゝたゆゑいかのこぞとたづね

まゝたればをこのため又なんぎ又あひこまりてをりやすをあなたまた
すけられまゝたとまうゝまゝたゆゑわたくしのおことよあなたのかんめぐ
みをよろこびなにかあなたよかんれいをまうゝたくわざくこゝへおい
でをねがひまゝたとまうゝまゝたのちうせいのそのちうのていねいなるをあ
いゝまばらくたびのつかれをやすめんところよとゞまりをりまゝたらち
ちうのちうせよたのみどふぞわがむことなつてながくわがいへよとゞま
りくだされとひたすらのたのみよりまちにんのむすめのうちひとり
をゑらみてつまとなりかのあるじのかふひつじのせわなどをまてそのいへ
ますまふてをりまゝたもうせいのまへわりのこてんにてけつかるなくらゝを
まてをりゝよひさかへてじつよふじゆうなひつじかひとならさがりまゝたれ
どそれらのこといすこゝもいとはずそのところよをよそまじふねんば
かりをりまゝたがそのうちよもたゞいすらへるのひとぐぐるゝみて

つきひををくるをたすけたいところかけてをりまいた。こゝよかのあ
きばろといふわうの志にうせほかのひとがあとをつぎまいたがやはり
ばろとせうてそのこゝろだてにさきのわうよりなほひときはあーきひ
となりーゆゑいすらゑるのひとくいのなほくくるーみをうけてをりま
たそのありさまのじつよめもあてられぬほどでござりまいた。されども
うせのたいかみさまよおいのりまうしてすくひをまつてをりまいた。さて
あるひとうせのたいひとりさびーきやまよのぼりひつじのばんを志てを
りまいたがむかるよ志げりたる志ばのなかよりふーぎよもひのひかりあ
らはれほのほさかんよのぼりまいたゆゑもうせのこゝろへぬことなりとち
かづきみれば志ばでなくたいひばかりますくつよくとびめぐるよより
たいろちながめてをりまいたがたちまちほのほのなかよりもうせもうせわ
れこのうちよありなんぢみだりよちかよるなかれわれのつねよいすらへ

るびとをまもるかみなり。いまわれいすらへるびとのねがひをきこかれ
らのくるーみをたすけむかーあぶらはむよなせーやくそくをわがへすかれ
らをか^{||}なんよつれゆかふとおもふゆゑなんぢはやくゑじぶとよゆきてわ
らのばろよあひいすらへるびとをか^{||}なんよかへすべーといへ。またいすら
へるのものよもわがいまいひーことをつげはやくゑじぶとよりつれいだ
ーか^{||}らんよともなひゆくよふよせよとのつげをうけもうせのつーん
でかみさまよおたづねまうすよわたくーがいすらへるびとよなにといふ
かみさなのおんつげとまうーまーやうとおたづねまうーまーたればひの
なかよりまたこゑありてわれのすぢはちあぶらはむいさく、やくぶをつね
よまもりまたか^{||}ららよやくそくせーゑ^{||}ほ^{||}バのかみなりとおんつげご
ざりまーた。ゑほ^{||}バといははじめもなくおほりもなくいつもいきてござる
かみさまとまうすわけでござります。そのときもうせのかみさまよむかひ

いかよあなたのおんつげでござりますともわたくしがまうすことをいかに
でひどくいゝがまんじまゝやうかさだめてかれらのうたがひのとけますまひ
とまうたらかみさまのなんぢがひつじをあつかふためよもつてをるつ
えをつちのうへよなげよとおほせられしゆゑもうせのそのとほりよい
たまうたときよふしぎやそのつえたちまちへびとなりはひまはりたれば
これを見るよりもうせのおそれにはげよふとまうたがかみさまのなん
ぢおそれずよそのへびのおをどらへよとおほせられたからそのごと
くどらへまうたればまたもどのつえとなりまうた。このときかみさまのふ
たゝびもうせよなんぢこのわざをいすらへるびどのまへよないなほなん
ぢをまんせぬならばいまひとつのわざをさづくべしなんぢこれをおこ
なへとおほせをうけてをふどころよさしこれまたいだがそのてまろ
くなりかつふきいでものできていとみぐるしくらいびやうにんのごとく

なりたればもうせいのふたゝびふどんきまいたが。またそのてをいれよとの
おほせよまたがいふたゝびふどころへいれまいたればもとのどほりすこ
もかはることのござりませなんだ。もうせいのかみさまのおんつげといひお
んわざといひはなはだふーぎよおもひまいたからすぐよいすらへるびど
よそのおんつげのことをはなしたひとおもへどもことばづかひのあ
きよよりとてもじふんでのことむつかしとおもふたゆゑかみさま
よこのことなれたれなりともほかのひとよおほせつけられまするやうよ
とねがひまいたればかみさまのもうせよおつげなさるよなんぢがくちの
なんぢみづからつくりーものとおもふかこれみなわがつくりーものなり。
さらばなんぢのことばをあざやかよなすもまたものいふことのできぬ
やうよするもみなわがころのまゝなりかつわれのつねよなんぢを
まもればかならずころづかひせずよはやくゆけとおほせられた。もう

せいなほもゆきかねてまばーかんがへてをりまいたればかみさまのおんこ
ゑあらくなんぢのあになるあゝろんのおいよゑじぶとよありてことよこと
バをよくすればいまかれよなんぢをむかへさすべーなんぢゆうよせずかれ
とどもよはやくゆくべーとおほせられーゆゑもうせいのひとまづわがやよ
かへりまかぐのわけをまうとよかたりまいたがかれもどくまんをな
たるよよりたびのこーらへをどくのへつまやこどもよどくまんさせにも
つをろばよのせていでゆきーがかみさまのおんことばよたがはずあ
ろんのみちまでむかひのためよきてをりまいたもうせいかみさまのお
んことばをおもひいだーかつひさぐのたいめんをなしたることなれば
たがひよよろこびてよてをどつてかたりおゑじぶとをさしていよぎま
した。さてまへよもまうーたるどうりいさらへるのひとくーのくるーきめ
よあひながらどーつきをかさねていまいたがわうのますくーかれらよた

へがたき 志ごとを あたへまゝした こと なれば われらを わすくる ひどのなき
かどられひよ 志づむそのをりからしもうせの あつろんと ともよきかりてか
みさまのおんつげを ほいほのうちに てきくことをつぶさよかたりき
かせしうへかならずこのちをのぐれいで かなんへゆく ことをゆるしたま
へば かみさま のおんことばよ 志たがふべしといひ しかせ。そのうへをへ
られたるふぎのわざを みせまゝた バひとく おほきよ よろこび ふかく
志んじて みなまことのころをもつて かみさま のふかき めぐみよ あつく
おんれいをまうし かつ のちくの さいはい をいのりまゝたのばるのいすら
へるの ひとく がいかよ ねがい をいたしても かなんへゆく やうよどり
はからふ ようなひとで いござりませぬ けれども このわらの がまん がなに
ほど つよひ とても かみさま のおんちからよ かつ ことのできるわけがご
ざりませぬ。されば あなた ても じぶん のちから ばかり たのみて かみさま の

おんめぐみとおんどくとをわすれてこの^{ゑじふ}のわりのごどくならぬ
ようよこころをおつけなさるがだいいちのことでござります

〔第廿三章〕

もうせふしぎのわざをあらはすこと 出埃及記自第五章

さてもうせとあゝろんのふたりにつぎのひばろわうのまへよいでいす
らへるのひとぐをゆるしてくにへかへすよりかみさまのおほせなれば
ゆめくそむくべきこととあらずとあゝろんのことばをつくりてまうし
たれとばろんもどよりぐうぞろばかりをまんじておりますことゆゑこ
ころあくまでたかぶりていまふたりのいふことをなかく去らうちする
もやりなくことばあらくかみとれたれのことなるぞわれんそのかみを
去らすなんぢなにはどわれぬがうともいすらへるびとをゆるすこと
のできぬといひはなちなほもこれよりたへがたさくるしみをあたへせられたゆ

ゑいすらへるびどのふたりのもとへきたりてわれらをかんのくにへ
まいるやうよあなたがたがわうさまへおはなすなされたからわれらのく
るーみのかへつてつよくせられいまのいかよきてこのせめをまぬかるこ
とかどうらみとかなーみをもつてかたりましたもうせのなげきてかみさま
よいのりそのことをねがひましたればかみさまのかねてさづけおきーふ
ぎのわざをけふこそばろのまへであらはすべーとおほせよまたがひふ
たりにまたもばろのまへよいでわれらのきさーくかみさまのおほせを
りけーそのまゐるーよふーぎなるわざをまめすべーこれもやはりかみさま
のおんつげなればこのわざをみーうへのかみさまのおんつげなること
をまゑじわれらのねがひをきかれよといひつゝもうせのあゝろんよそ
のつえをわたーちよなげよといひつけたればあゝろんのすぐよなげま
たがつえのみるうちへびのかたちとかはりはひまはりてまたもどのつ

えよなりまゝたゆゑふたりこのふゝぎなるわざよをせろきかならずね
がひのとせりよまたがふとおもひのほか。ばろのころのすこゝもかは
らずゆるすことをなさぬゆゑこのうへにいかにすべきところをなやま
しひとまづそのバをせりぞきまゝた。のちまたふたりのかみさまのをへ
よよりあさはやくいでゆきばろがみづあびよくるかはばたよいたりま
ちをりまゝたればほどなくわうもきたりゆゑ。ふたりのわりよまうすよ
のあなたいせりてもかみさまのおほせよおまたがひなさらぬかされば
あなたがみよかゝるわざをあらはしかみさまのおちからをせめそふと
いふよりはやくあゝろんがもち一つえをもつてかはのみづをうちまゝたが
そのみづたちまちちとかはりさもあかきいろとなりまゝた。まだそのうへ
よゑじふとよあるゑどもいけもすべていすらへるびどのつかふほかの
そのみづのこらずちとかはらぬところなければなかよすみゑるうをるい

のこらず 志にうせくさりーにほひかはより あがりたれば ひどくのくる
ーみたとへがたなくなげきかなーみまーたれどばろのなほもことどもせず
ひどくのなげきをたゞよそよみてをりまーたゆゑかみさまのいまひと
つのわざはひをあたへてかれらがこゝろをくだかふとその志かたををー
へたまひーよよりあゝろんのそのをーへよまたがひつえをふりあげーが
たちまちいくせんまんのかはづかはよりはひあがりまちくのいへよい
りきたりざーきだいどころのさべつなくひどのすまひをするところのど
こよでもあらざることなくあまつさへねどころまでもはひあがりまーた
が。つひよのわうのうちよまではひきたりころーすててもますくふえ
いすねどころのわかちなくはひあがりはひまはりーことなれば。いまのば
るもこまりはてこれいすらへるびとをゆるさぬばつなればひとまづゆるさ
すばかなふまじとてもうせ、あゝろんのふたりをよびなんぢのねがひを

ゆるすゆゑはやくかはづの わざはひをさるべいとまうした。ふたり
 このことばをきくすぐさまいのりをなすければかはづのことごとく志に
 せまいたがなほそのにほひのこり志ばいのくさくござりまたゆるひとび
 どうちよりかはづの志がいをあつめすていまたいなやまよりもたかく
 ござりまたかくわざはひもやみまたればまたもゆるすころなくなり
 ばろいふたゞびいすらへるびとをつかひはじめまたよりかみさまのを
 いへをうけあゝろんいつえをふりあげいこのたびにかずかぎりなき
 志らみいでいとおもへばかりほこりまでことごとく志らみとなりけものや
 ひとよつきまたればわういなほもかまふころなきゆる。またもすま
 んのはへとびきたり志よくもつをけがひとごとくたべるうちあぢは
 ひかはりくらふことのできぬよりわうもたびくのわざはひよこりの
 みならずこれらのことゝゑとひとのみにていすらへるびとよ

すこゝもなきゆゑふぎのこととのおもひながらほもいつはりをやう
かならずなんぢらをゆるすゆゑこのはへをのけよとたのみせられたま
り。もうせいのりをなすこのわざはひを去りだけせられたがいくかたで
もゆるさねばかみさまのゑじぶとびとのたいせつなるうし、うま、ろば、や
ぎ、ひつじまで去にたえるやうなさいました。がまだこれよりもばろの
こりませぬゆゑゑじぶとびとのからだよできものをふきいだすやうな
さいました。よよりそのいたみたえがたくなさかなむこゑのくにぢうよ
きこえまゝたれどばろの口だまことこのころよりいすらへるびとをゆる
ませなんだ。おなたもよくおきくなさりませこのばろのがまんつよきひ
となればかみさまのおんちからあるをわすれなにごともわがころと
わがちからまかせよなるとおもひ。もうせ、あゝろんがふぎのわざをあ
らはしてもさとらずかくいくたびのわざはひもあひてもなほこりずよを

りまゝたぐこののちいかゞなりまゝよふかいかよばるががまんづよきひ
 どどてもかみさまよかちますることのできませぬからとなたもこのはな一
 をよきてほんよさいまゝめとおぼゝめてつぎをおよみなさりませ

第〔廿四章〕

のちのわざはひ

出埃及記 第九章

さてそのうちもうせ、あゝろんのふたりのまたもばるわうのまへよきて
 いひますよのこれまでたびくわざはひをくだいたれどあなたにそれよ
 こりたまはねバあすのほほきなひやうをふらせてそとよあるものひひと
 でもどり、けだものでもわかちなくみなうちころされるでござりまゝよふき
 をおつけなさいまゝといひまゝたぐそのどほりあくるひもうせのつえ
 をあぐるとひどくかみなりにはかよそらよひいきいなびかりのちやで
 かいやさひやうとあられがまきりよふりけものもひどもうちひいぐれく

さやごこくのうちたふされそのうへかみなりのひよきつくされそとよ
あるものひとつと去てうたれぬものござりませなんだがいすらへるび
とばかりのこのわざはひをのげました。ばろわりのまたももうせとあ
あろんまたのみかやうなわざはひがあつてひとくがおほきよなやみ
くるゝむことゆるなにとぞわがくにびとのためよいのりてこのくるゝみ
よりたすけよいらへるびとのぞみのとほりすぐさまかなんへゆくこ
とをゆるすであらふこのことばよふたりのかみさまよいのりてわ
ざはひをのげました。ばろのまたもだましたばかりですこゝもゆるすこ
ころのござりませなんだ。そこでふたりのまたばろのまへよゆきこのた
びもまたうそをおつきなされたゆるこんでんからいなごをふらせて
いせんよまさるなんぎをかみさまがおくだいなさるであらふといへどば
ろのこりたるやうすもなければもうせのまたつえをふりあげよふぎ

やたちまちやまかはもいまよくづるゝばかりなるひいきしておほかせにはかよふきいだーいづくよりかかぞへがたきおほくのいなごかせよつれてどびきたりくさき、このみのへだてなく志ばーのうちよくひつくーそのうへひとぐのいへよどびいりあーのふむべきところもなくねどころまでもはいこみたればばろもやくにんもこまりはてもうせ、あゝろんをよびよせてじぶんのつみをくやみこれまでのいつはりをわびせよこのばちをたすけよといひよめた。これよよつてふたりのまたいのり志ていなごをのけましたがこんどもまたばろのわびことのみなうそでありましたゆゑふたりもいまいばろのいふことをきゝいれるころがござりませなだ。もうせのまたもばろをおそれさせようといのりを志ましたらそらがにはかよかきくもりいすらへるじんのをるところよばかりひかりがあつてそのほかにいちめんまつくらとなりひとぐのあらくこともできぬゆゑ

おほきよくるーみまーたがみつかののちよやりやくはれまーた。ばろのこ
れよよつてこゝろをあらためる。どころでいなくかへつてもうせ、あゝろん
のまわさをはらだちなんぢらにせとわがかはをみる。ことなかれもーわが
まへよくるならばきつとなんぢのいのちをとるといひまーたもうせもこ
たへてなんぢもまたわがかはをみる。ことなかれといふてわかれました。そ
こでかみさまもいまいおんいかりなされてもうせとあゝろんよおほせら
るゝよいわれこのたびの^{あじぶと}のいへごとよつかひをやりひどぐ。
のさうれりむすこをころすほどよいすらへるのひどぐのこひつじをこ
ろーかないのころすそのにくをくらひそのちをいへくのもんばーらや
かもるなどよぬりつけておけさすればそのまゝあるいへのうちへのつ
かひをつかわすまいまたひつじをたべたのちのたびだちのまたくをな
たちながらにくやばんをたべよとおんつげがござりまーた。いすらへるの

ひどく、その おんつけ をまもりおほせのごとく、ひつじのちをもんのはらゝぬりつけばんをこゝらへたびのよいいととのへてまちてをりま
 したがゑじふと じんのかくとも ちらすいつものどふりゝねてをりまいた
 があるよよなかごろゝとこのいへもさるれらのむすこにはかゝみな
 ちにまいたゆゑゝいづれもおどろきてをつくりやりぢをなゝいろく
 かいほう すれどもそのかひなければふたふやのなげきひとかたならずかな
 ーむこゑのゑじふとのくにぢりゝきこえぬところのござりませなんだこの
 ときばろのたいせつなるさうれりむすこどもゝちにあいたゆゑゝばろ
 いまのかなはじとかなゝきあまりもうせゝあゝろんのふたりをよびよせ
 いすらへるびとをみなゆるすゆゑゝひつじ、うゝ、ろばそのほかのものま
 どもみなもちてはやくこのくにをいでよとまろゝつけまいた。ゑじふと
 じんもかねてよりかようゝわざはひのくるのゝみないすらへるのひと

をゆるされぬよりおこつたことと志つていますゆるゑよいまのわうさまの
ゆるしたるをさいはひはやくこのちをたちさりてわれらのなんぎをたす
けてくださいとたのみまゐた。いすらへるのひとぐのこれをきくさらば
われくのはやくたちのきまゝよふが志かゝいまままでわれらをきうきん
一よつかふたればそのかはりよなんぢらのかざりよもちひーきんぎんの
志なものをおれらよくだされよといひまゐたらゑじぶとじんもどくーん
志てのぞみのとふりよつかはまゐた。さていすらへるじんにてはやくこ
れらのものをとりそろへにもつをつくりろばよおいせひつじとともよ
ひきつれてひとかずおよろしくじうまんにんどもよゑじぶとをのがれい
でまゐたがこのさわぎよまぎれてゑじぶとにてぞれいよなりてゐたるほか
のくにぐのひとぐもともよのがれていでまゐた。ときよかみさまの
いすらへるひとよおほせられますよのわれのやくそくをちがえず志ていま

なんぢらをかゝんゝよみちびくなれば、なんぢらいつまでもこのことをわすれぬやうよせよとのかんいひつけよよりてまいねんこひつじをころしてたべまたこのときもちひいたねいれぬばんをもころへてまつりをいたしまたこのときいすらへるびどのもんよのかみさまのつかひがいらすすぎこゝてゑじぶとびどのいへよいりたることをよろこびのちよこのまつりをなづけてすぎこゝのまつりとまうゝまゝた。このまつりのもつともたいせつなることでござりまするゆゑわれゝもわするゝことのできませぬいすらへるびどのこひつじのちをぬりおきてかみさまのおんつかひのいりきたるをたすかりたるやうよわれゝいゑすきりすゝのおんちよよりつみをたすけられることでござります。さてまへよかきゝゑじぶとびとがうけまゝたわざはひをいよかぞへておきかせまうゝますまづ

第一 みづがちゝほとなり

第二 よかひづ

第三 よまらみ

第四よはへ 第五よけものがまに 第六よできもの

第七よかみなりとひよう 第八よいなご 第九よくらやみとなり

第十よさうりやうむすこがまにまいた

さればわれくもまいにちをかすつみよよりかみさまのおんいかりをう
けゑじぶとびどのやうなばちをかうむるはずなれどいゑすきりすどのお
んめぐみよよりたすけられたることなれば。いゑすきりすどのおまになさ
れたのまつたくわれくのおんあがなひとまじふたゞびつみををかさぬ
やうよなざるがかんじんのつとめでござります

〔第廿五章〕

こうかいをわたること 出埃及記 自第十三章

さてもいすらへるのひとくいながきなんぎをたすかりてやうくゑじぶ
とをのがれいでかなんへいたるみちへでまいたがかなんといさげとこ

こよりいくひやくりへだたりたるところともまねぬのみならずたゞひろきのやまばかりのたびなればこゝろばそくあゆみゆきまいたが。ゆくさきまくろくものひとむれがあらはれいすらへるびとをまもりひるひのかげとなりよるひひかりをはなちみちをてらまいたゆるあつさのうれひもなくくらしまよひもなくもがとまればひとぐもやすみくもがゆけばまたあるさつひまこうかいといふうみばたまでいまいまいたがはしもなくふねもなければいかいたてわたらうとまあんをいたいながらてんまくをはりてそのまたやすみてをりまいた。たちまちうろのかたよりうまのこゑまたいくるまのきえるひいきがきこえまいたゆるふぎなことふりかへりみればおほくのぐんせいすゝみきたりいちどよときをつくるありさまだんくちかづくをみればたいやうすなはちばるにてさきよいかみさまのばちよよりいすらへるびとをゆるまいたがい

まゝまたそのことをこうくわいていつたんゆるゝかへせゝひとぐゝを
ふたゝびひきつれかへらうとておひきたりまゝた。ひとぐゝのこれを見てお
ほひよおそろきにげようとすれどまへにうみうしろにてきのぐんせい
なればいかよともせんかたなくころをきめてたゝかひをいたさふと
すれどをんな、こせもらおほく志てなかくてきたふこともむづかゝければ
もうせのたゞいつらんよかみさまのめぐみをねがふがだいいちといのり
をはじめまゝたがいすらへるのひとぐゝのふかくもうせとあゝろんをうら
みかやうなるわざはひのみななんぢがわれらよあたへなりさきよなん
ぢのすゝめなくばわれらのゑじふとよとゞまりてこのつらきめよのあふ
まひよとつめかけつめかけいひまゝたれど。もうせのすこゝも志んばいせ
すふかくかみさまよいのりをいたしまゝたればかみさまよりもうせよさ
きのつえをふれとおんつげがありまゝたゆるすぐさまそのおんことば

よまたがひつえをうみのうへよふりあげまいたらふーぎよもみづのみ
ぎひだりよわかれかべをつくりーやうよなりそのうちひとすじのみち
がでまゝたればひとぐいにかみさまのおんめぐみをよろこびそのうみの
なかをわたりまいたこのときのはやくれがたでありまいたがこのとき
つもまへよあらはれるひのはいらがいすらへるびどのうーろよたちて
やはりひかりをあたへまいたがこのひのはいらのうーろにくらくまてさ
らよひかりをゑじぶとびとよあたへませなりだゆゑゑじぶとじんにいすら
へるじんをみることできすすみかねてをるところをばるいいらちてそ
のうみのなかなるみちをおひかけよとさーづよまかせのぐんせいともい
なにかんがへもなくみちあるをみてさいはひとらみのなかへすすみ
やうやくなかばまでまいりまいたがゑじぶとびとのりたるくるまがそん
じてさらよゆくことができぬやうよなりまいたばるいこころよさとりて

まつたくかみさまがいらへるびとをたすくるためかくなされたことであ
らふもはやあじぶとへかへるがよひといひつけましたがいすらへるびとに
はやこのときむかふのきよあがりましたゆゑもうせいのまたもつえを
もつてうみのうへよふりあげたればまたよくひまよらみのみづのもど
のごとくよひとつとなりばるとおほくのぐんせいのひとりものこらず
みづのそこよなりまにうせました。いらへるびとにいますでよあやうさ
どころをたすかりことゆゑかみさまのおんどくをほめさきよもうせが
すてられるときかはのそばよばんをきてゐましたあねむすめのみりやむ
ようたをうたはせました。そのうたよ「われあはばをさんびせんかれはな
はだしくうちかちててきののりてもうまももろともよらみのなかにぞな
げこまれたり」かくおほせいのひとぐがかはるがはるうたいをんななり
ものをならしてよろこびました。かみさまのすべてあくにんよんばちをあ

たへよきひとよのさいはひをくださるゝことなればどなたもよくくこ
ころをもちひおんじあいをおうけなされ

〔第廿六章〕

てんよりまなふりたること

出埃及記 第十六章

いすらへるのひとぐいのわざはひをのぐれやうやくよあらびやのはらよ
きかゝりまいたがこゝのいたつてひろきちにてかはもなければいけもな
くくらふものどてのなさよゑじぶとよりもちきたりよまよくもつたい
ていなくなりまいたゆるゑいまのうえじにするやうよなりまいた。それゆる
またもひとぐいのもうせよむかひいかよまてこのなんぎをたすくるぞ
とどひまいたがもうせのこたへてたゞかみさまよおまかせまうすがよろ
しひといいどまよひふかきひとぐいのなかくきゝいるゝやうすもなく
つぶやひてをりまいた。かみさまのはやくもごぞんじのことなればそのよ

のうちよひろきのよまなといへるいろゑろきたべものをおほくおふら
せなさりました。かくどもゑらすひとぐいのよくてうはやくおきいでん
まくのそとをながめませればちいさなまろきものがいつばいふりてあーの
ふみどころもなさはばなればひとぐいたがいよどふてできたといふこ
とをもうせまたづねました。もうせのひとぐよこれにてんよりなんぢら
よあたへたまふたべものともうりました。そこでひとぐのおほくもなく
またすくなくもなくひとぐのいちにちのゑよくもつだけひらひどりた
べてみればゑごくりまさきものでござりました。さてそのときよりこれをま
なとなづけましたかいつたいこのまなといふものいろいろきれいよゑて
あぢはひよくひとのちからにてつくるべきものでござりませぬがかみ
さまがひとぐをおんめぐみあるゑるよどててんよりふらしたること
でござります。これよりまいあさふりますることとなりましたかもしすこ

いでもひよあたれば すぐさま きえうせします ゆゑひとぐいかならずあ
さはやくおきいでて ひろひまいた。もうせいかみさまのおんめぐみをきりて
をります ゆゑひとぐいよこのまなまいにちまいにちおあたへなさるも
のなればかならずたくわへをなさずいりよう づいひらへとまうしまたれ
どなかよのそのことよまたがはずふくろ などよいれおきますれば あくる
ひまでよむーがつきて たべることいできませなんだ。これにて せなたも
おわかりなさるでござりまーよふなにはどたくわへなさるでも かみさま
さへ 煮んじて をりますれば からだの 煮よくもつ まうすよおよばず たまー
ひのかてまでもおあたへくださります ひとぐいよまなにてよろこびまいた
れどみづのなさことよよりまたももうせよせまりまいた ゆゑもうせの
たかきいはあるところへひとぐいをつれ ゆきつえをもつて いはをうて
バおのづから みづが わきいでまいたよより おもはず ひとぐいのどをう

るほしをうた。これらのわざのもうせがみづからなすわざでのござりませぬみなかみさまのおんめぐみよりおあたへなされ。ことでござります。かくもかみさまのいすらへるのひとをめぐみたまふ。ひとぐいのおろかなるころよりまたもかみをわすれまよいのころをおこしうた。さておなたもかみさまのいつもかくおんめぐみをおあたへなざるをえんじけつしていすらへるじんのやう。まよはずた。かみさまもおまかせなざるがだいいちでござります。

〔第廿七章〕

まないやまのこと

出埃及記 自第十三章

いすらへるのひとぐいのまいにちくもよみちびかれひるのあきよるのどいよりおほくのひかすをへてあるところよつきまいたがこゝにてくものすこしもろごかぬゆゑまづこのちよあゝをどいめまいたがこのところ

の志ないやまとてさきよもうせがひつじをかふためよまいりてひのな
 かよかみさまのおこゑをきこまいたいとたかきやまのふもとでござりま
 した。さてひとぐいづれもこよもどいまりてんまくをはりかりよすまひ
 をいたしまたがこのときかみさまのもうせをやまのいたきよめし
 しておほせられやすまわれいすらへるのひとぐをたすけてこれおでみち
 びきーがいまわれひとぐよのぞむことあれがわがいひつけをまもるか
 せもらぬかなんぢふもとよくだりゆきてひとぐよたづねきたるべいと
 ありました。もうせのすぐさまやまをくだりいすらへるのひとぐをあつめ
 かみさまのおんことばをかたりきかせかついひまするのもしこのおほせ
 をお受けせばかみさまのあいしたまふひとぐなりときくよりひとぐ
 おほひよよろこびかねてよりわれくをおめぐみくださるゑはばのかみさ
 まのことなればたれかおことばよそむさまよふやとこたへましたもうせ

いまたもやまよのぼりそのとほりをかみさまよまうーあげましたかみさ
まのさらばみなのもものわがことばをきかすべーいづれもそのえたく
をなせよとおほせられーよよりもうせいのふたゝびやまよりくだりひとび
とをあつめなんぢらきよききものきてこゝろをまづめかみさまのおん
ことばをきくべーかならずみつかのうちにこのやまのうへよおんこゑ
あるべーといひきかせやまのふもとよなはをはりひとぐをこのうち
よいらぬやうよままたけものよもこのなかのくさをたべぬやうよい
たさせいまよもおんこゑがきこゆかとまつてゐましたがてうどみつか
めのあさはやくおほひなるこゑのきこえまーたればもうせいのこれこそか
みさまよおあひまうすときがきたのであらふとひとぐをともなひて
んまくよりいでやまのふもとまでまいりまーたがやまのますくひきき
わたりかつうごきいたいきよりのひがもえいで、もとけむりとひとつ

よなりて たちのぼり そのなかより のきびーきいなびかり のひかり をはな
 ちかみなり のてんち もくづるゝほど よひい きわたれ ばもうせ もいま の
おそろーく もの を も い は ず ふ る へ て ぬ ま ー た ぐ 。 か み さ ま の も う せ ひ ど り を
や ま へ め ー ま ー た ゆ ゑ こ は ぐ の ぼ り ゆ き ま ー た 。 あ と よ の こ り ー ひ ど ぐ い
の は じ め よ り み る も き く も た い お そ ろ ー き ば か り に て ふ も と よ ま ち て を
り ま ー た 。 さ て か み さ ま の お ほ ひ な る お ん こ ゑ に て お は な ー な さ れ ー そ の
お ん こ ど が よ わ れ の す な は ち なん ぢ ら を ゑ じ ぶ と よ り つ れ い だ ー く る ー み
を す く ひ ー か み な り と お ほ せ ら れ あ ら た よ つ ぎ の い ま ー め を ひ ど ぐ い よ
お あ た へ な さ れ ま ー た

第一 なんぢわがまへよわれのほかかみありとすべからず

第二 なんぢのためよぐうどうまたかみ のてん ま も の ち あ る ひ の ち の

またのみづのなかよあるすべてのもののかたちをつくるなかれ

これらよひれふーまたつかふることなかれそのわれ急はばなんぢの
かみのねたむかみよ志てわれをにくむものよのちのつみを
こさんよだいよいたるまでばつーわれをいつくーみわがおきてを
まもるものよのせんだいよいたるまでめぐみをあたふればなり

第三 なんぢのかみ急はばのなをみだりよいふことなかれその急はば
のそのなをみだりよいふものをつみなーとせざればなり

第四 あんそくにちをわすれず志てこれをせいじつとせよむいかのあいだ
はたらきてすべてなんじのわざをなすべーなぬかめのなんぢのか
み急はばのやすみなればなんぢすべてののわざをなすことなかれな
らびよなんぢのむすこむすめ志もべ志もめけものおよびもんないよ
あるたびびどもまた志かりその急はばむいかのあいだてんとち
とうみとそのなかよあるすべてのものをつくりてなぬかめよや

すみたればなりゆゑ又急はばあんそくにちをいはひてこれをせいじつとせり

第五 なんぢのちととはとをうやまへなんぢのかみ急はばのなんぢ
またまひたるちのうへ又おいてなんぢのいのちをながからしめん
がためなり

第六 ころすことなかれ

第七 かんいんすることなかれ

第八 ぬすむことなかれ

第九 どなりびと又ついでいつはりのしやうこをたつることなかれ

第十 どなりびとのいへをむさばることなかれどなりびとのつまとその
まもべまもめうし、ろばまたすべてどなりびとのものをむさばること
なかれ

これらのどほのいまいめをおさづけなされまいたがあまりのおそろい
さよひとぐいだんぐあどへ去りぞきやうやくおんこゑのやみたるを
よろこび。いそぎもうせのところよまいりてこののちにかたくかみさまのお
んいまいめをわれくゝいまもるゆゑふたゝびかくおそろいさめよあはぬ
やうよとたのみよよつてもうせのまたくろくものなかをのぼりてその
ことぐらをかみさまよまういあげたれば。いまよりなんぢをもつてわがこ
とバをかれらよつたへえるであらうかれらわれを去んじわれをあいする
ならばわれまたかれらをあいしてさいはひをあたふべーとおほせられいゆ
ゑもうせのよくくこのことをひとぐいよまうせーかどどかくまよひや
すきものなればかみさまよそむきのいたさねどまごころをもつてあいする
ことをいたしませぬ。それゆゑかみさまのまたももうせをやまよおよび
なされ去じふにちのあいだよるひるのわかちなくかみさまとともよを

るやうよなされまいたがもうせいのうえかつへのうれひなくつねよくものなかよりおほなるのこゑをきいてをりまいたがそのをはりのひよいにてつくりよにまいをりをあたへよなりまいた。もうせいのこれをみるよさきよおきかせなさりよとほのいまめがもじにてかきつけてありましたこれまつたくひとぐのわすれぬやうよなされよこととおもひまいた

〔第十八章〕

きんのこうをつくること

出埃及記 第三十二章

かみさまのとほのいまめのそのはじめよわれのほかよかみありともふことなかれとふんいまめなされよをいすらへるのひとぐのはじめのまじてまもりまいたがもうせがながくやまよりくだらずくももまだやまよとまりぬやするゆるうごくこともならずいかのせんとあろんのもとへきたりいひするよわれらかなんよいちにちもはやくゆ

くことをねがふ。もうせいのいまよかへりこず。なにをぞすみやかよわれ
われをたすけてくにへかへられるやうよきてくだされも。そのことも
かなはず。あじぶとびとのするやうよわれらをかなん。よつれゆくかみを
つくらせよとねがいおいた。あゝろんひきてよきことでないといふ
ながらも。ゆるさねばかたくななるひとく。なればたちさはぎころすこ
ともまたはからずとつひよゆるしてひとくをよび。なんぢらがさきよ
あじぶとをいづるときかのくにのひとよりもらひうけ。きんのみよかざ
りをもつならば。それをばづしてもちきたれといひおいたれば。いづれもそ
のこともまたがひておほくのきんのみよかざりをもちてまいりおいた。あゝ
ろんひひをもつてそれをとらかり。こうりのかたちをつくりおいたがひと
びとのそれをみてこれぞわれらをおたすけなされ。おんかたなりとよ
ろこびうやまひまいた。あゝろんひたかきだいよ。そのこうりのかたちをのせ

まへよそなへもののだいををきあすこそおほひなるまつりのひである
 とふれまはれたればひとぐいのあさはやくおきいでひつじややぎのそな
 へものをあげほめあがめていはひまいた。おろかよもこのひとぐいのさき
 よかみさまよりかのいまめのだいにばんめよぐうどうを志んするなかれ
 とおほせられしことをはやくもわすれいともたいせつなるおんことばよ
 そむきしことゝあはれなことでござります。もうせゝかやうなこととゝ志
 らずかみさまのおんそばよものがりなど志てゐましたがかみさまゝく
 らきどころのことまでもよくごぞんじなればまいてかれらがなすわざゝ
 てよとるやうよごらんなされ。もうせよかれらゝかやうよわがいまめ
 をわすれたればわれいまかれらよばつをあたへのこらすころして志まはん
 とおはせられました。もうせゝゝいすらへるのひとぐいよかはりかみさまよあ
 やまりいひまするゝゝかねてかれらをおんたすけくださるためゝゝを

いだいかれらのせんどあぶらはむへのおんやくそくをおまもりくだされ
たことなればかれらのつみをいまひとたびゆるしてかなんよゆくこと
をゆるしたまへとねがひよより。やうやくかみさまのもうせのことばを
おきよなされてかれらをころすことをおやめなされました。それゆゑもう
せいおほひよよろこびとほのいまめのほりつけてあるいをもちや
まをくだりふもとまでまいりましたればうたをうたふこゑがきこえましたゆ
ゑそのところよきてそのありさまをみるよこらーのかたちをこらへて
そのまへよひとぐ、がさけびいさみてきちがひのやうよこらーのまはり
をぐるくまはりてまつりをえてゐましたゆゑ。もうせいおほひよはらた
たらくあのたいせつなとほのいまめのほりつけてあるいをもちよな
げつけてうちくたきなほもいかりよたえずだいのうへよりこらーをひ
きおろしひのなかへなげいれこなく、よくだきみづよませてそのみづ

をひどぐよのませました。そののちもうせのあゝろんのまへよゆきなんぢのなにゆゑかやうなあゝきことをひどぐよゆるせいかときよましたれがあゝろんのひどぐよをよろこばすためかれらののぞみよまかせましたとこたへましたれどこれのかみさまのおんいまゝめをやぶりたるつみなれがまことよあゝきことであうました。さてもうせのひどぐよをのこらすあつめゑはばよまたがふころあるものわれよきたれとまうました。どきよもうせのはうよくるものあまたありました。もうせのこれらのひとびどよいひつけてかみさまよまたがはぬものさんせんにんばかりをころしてままひそのほかのものよもばつをあたへたまふはづのところをもうせのいのりよよりころされることだけゆるされましたがつひよままひをうけることとなりました。そののちかみさまにまたもいーにどほのいまゝめをほりもうせよまたへささよわりーかはりよせよとおほせられ

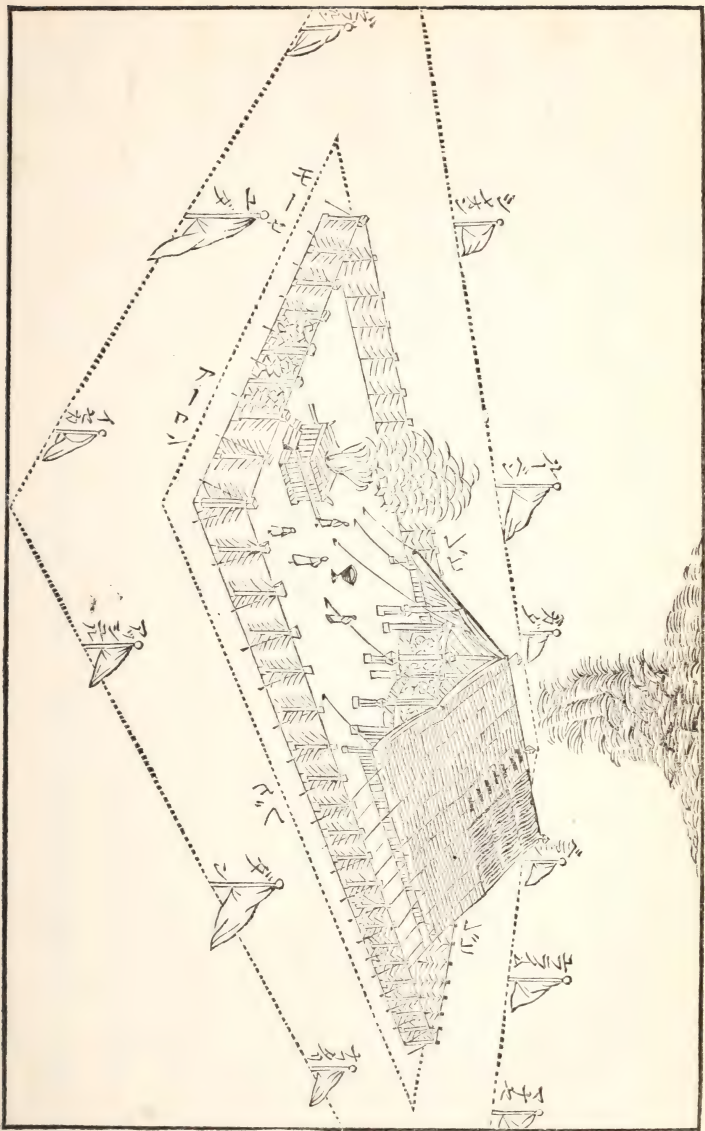
ふたゝび去じふにちのあいだかみさまと去づかよおほなりを去てやりま
した。がさきよありーおほひなるひいさのものはやありませなんだ。もうせの
かみさまをちゝのごとくよ去たーみておそれずおそばよゐました。がせい
れいかれのみよやどりやまをくだりきたるときにかみさまのおんどく
かれのかほよあらはれひのごとくひかりをはなちければあゝらんもその
ほかのひとぐもおそれてちかづきかぬました。ゆゑもうせのさきよかみ
さまのおんつげありーことをおもひいだーかほよひとつのおほひもの
をあてひとぐよあひました。それよよつてひとぐもおそれるけいさなく
みなちかづきてはなりをいたしました。このたびのよくもうせのいふこと
よ去たがひとほのいまーめのいーをたいせつよするばかりでなくぐら
どりををがむこともやめよいたしました。

〔第廿九章〕

まくやのこと

出埃及記 自 第三十五章

もうせがやまよをりまゐたときかみさまのきれいなるごてんをつくるやうにおんいひつけなされまゐた。まかーかみさまのいへなどをかつくらせなさらずともてんこくのおすまひがござりますればふそくのおんこといすこゝもありませんのにかくおほせられまゐたわけのいすらへるびどがわれはてたるのよすまひをいたすあいだつねにおんまもりあることをかれらよまらせるためよいへをおつからせなされたことでござります。かくてもうせのやまよりくだりひどぐをよびあつめいひつけますよなんぢらのあんそくにちよのかならずすべてのまごどをやめかみさまをわがめまたかみさまをまつるためきれいなるいへをつくるべし。これのみなかみさまのおんのぞみなればひどぐはやくいへをつくるためよい



おんま

りやうのものをもちきたれとまうゝまゝたれば。さきよゑじぶどをいづる
ときもちいでゝまなぐをめいゝととりそろへてもうせのまへにだゝまゝ
た。そのまなぐのさきよこらゝをつくりたるのこりのきんやまたの
ぎんあるひにきぬぎれあか、あを、まろなどいろゝのあさまたのひつじ
やぎのかはなどでござりまゝた。もうせのいちゝそのまなをみますよ
なかよのなかゝねのたかきものをもおゝむころなくもちきたるを
よろこびまゝたがたいこれらのものばかりでかみさまのみどころよかな
ふいへをつくるのいともかたきことなればおほくのひどのうちよりい
へなどをつくることよくはさきものふたりをゑらみこのものをかゝら
となゝそのほかのひとぐをてつだひととりきめまゝた。さてそののち
いくつきもふゝんよかゝりまゝたがまつたくひとぐのはげみとはたらき
とよよりとふゝきれいよたちあがりまゝた。まづそのつくりかたのひろ

きものなれどももちほこびのできるやうよてがるよいたをつちのうへ
 またてこれをあはせてかこひとなーおくをもつてやねとーまたどまへ
 もやはりまくをさげていたのかはりとなーそのうへゆかもなくたゞあ
 ほくさのうへよすはるやうよいたーいたのこどぐくきんにてつゝみ
 まくのきれいよいろどりはーらのかすのどほんありてまのふたつあり
 ますがまへのひろきまよのきんのだいをおきそのうへよかうろをお
 きかほりよきものをたきそのにほいをいへのうちよみちわたるやうよ
 いたーまたそのわきよひとつのつくゑをおきまーた。これもきんにてつ
 くりそのうへよのきれいなるばんをそなへあんそくにちどとよそれを
 かへてそなへまーた。そのつぎよのきんにてつくりたるなつつのらうそく
 たてありてそのどもーびかいやさわたりまどもなさいへなれどいつもあ
 かるくござりまーた。またひとつのせまきまのまくをもつてまへのまと

まきりをなすそのうちよきんのはこをおきそのうへよゝまたきんに
てつくりたるてんのつかひのかたちをかざりまゐた。このはこにかみさま
よりさきよもうせよおさづけなされたいせいのかきつけをおさめるた
めのものでござります。このまゝときくかみさまがおくだりありてさ
かえをおあらはしなざるまでござります。かみさまがおくだりなざるどき
のいつもくもよかのりなされますがそのくもゝのいつもこのはこのうへ
よあるてんのつかひのところよとゞまります。それでこのはこをめぐみ
のみざともまうしまゐた。またこのせまきまゝあかりもなくまじもなき
よおんさかえよよりひかりかゞやします。ゆゑきよさうちのきよさところ
となづけまゐた。かやうよきれいよできまゐた。これみなひとくがかみ
さまのみどころよ。またがひたい。ためよせいをだしてきをきるものもあ
ればきんをとらかすものもありたいをつくるものもあればまくをぬふ

ひどもありて。をどこをんなのわちなくそれくころをひとつよきて
はたらさまいたゆるでござります。このいへがすなはちまくやとまうすもの
でござります。

〔第三十章〕

さいーのこと

出埃及記 自第二十八章

まくやのそとよひひろきあきちありてばうぐぬをたてまはしそのくぬよ
まくをはりまんちうにていとおほひなるだいをつくりそのうへよひか
みさまのおほせのとほりひつじ、やぎ、うーなどのそなへものをいだいま
した。これにいゑすきりすとがひとぐのつみをすくはんためかんみを
もつておあがなひくださるかんやくそくをおほえさせるためかみさまがひ
とぐよけものをころーそのちをそとぎそのからだをやきてそなへよ
とおほせられまいたこととでござります。あべるとのあとおふらはむいその

とどくそなへものをいたしまたがいまもそのときやうよまんちうの
だいよそなへものをいたしそのだいのわきよのおなじまんちうのおほ
ひなるたらひよみづをいれておきまたがこれのさいといふてかみさ
まをまつることをつかさどるひとがてあをあらふためでござります。こ
のさいのおさあゝあゝろんがつとめるやうよかみさまよりおんさづを
うけそなへものをまたりまたりかほりものをたきともいびをあげなど
のことをいたしまたこのまくやのうちのきよさうちのきよさところ
といふまよもかみよりいれよとのおほせよよりあゝろんひとりい
ちねんまたいいちどまくをかくげてそのへやよいりめぐみのだいのう
へよといまるくもをみることできまた。あゝろんよによにんのこと
もがありまたがちうのたすけをいたしてまつるべいとのおほせをう
けみなまろききものをつけまつりのてつだひをいたしまたゆるこのこ

どもらをさいーとよびあゝろんをさいーのおさとやうーまいた。もうせの
 すでよかみさまのおんさーづよきたがひまくやをことごとくくみたてすべ
 てのものよあぶらをそよぎあゝろんよのきれいなるきものをきせその
 こどもらよの志ろききものをつけさせこれくかいらよあぶらをそよぎ
 ました。そのときすでよかみさまのおくたりありておんさかえをまくや
 よみたいたまひかみさまのおのりなさうーくももまくやのうちよどいま
 りひかりをはなちました。さていまでいたれもかみさまをみることで
 きませぬなれど志んかうよよりてのいつかおんめよかよりもうせや
 あゝろんよまざるどころのさかえをりくることよどざりまーよふ。かくか
 みさまよそなへものを去てをがむことのできるやうよまくやがでさまー
 たゆゑいすらへるびどのいづれもよろこんでをりまいた。またさいーやさ
 いーのおさのまいにちそなへものをあげどもーびをあげあんそくにらご

どよのばんをそなへかへなどいた^ーま^ーた。そなへものけものにはじ
めよかみさまよりひがくだつてやけま^ーたそのひのきへぬやうよきを
つけいつもそのひをもつてやきま^ーた。ひとぐいにかみさまをがむため
まくやにはよゆきさい^ーのおさあ^ーろんがかほりものをたくをそと
にてまつてぬま^ーたればあ^ーろんまくやのうちよりいできたり。われいま
かみさまよいのりを去てをり^ーがかみさまなんぢらをつまでもめぐ
みまもるであらふとおほせられたゆゑみなくゑはばをあげよといひ
つけま^ーた。さてもひとぐいにかみさまのめぐみよよりまくやをつくるう
ち^ーな^ーないやまのふもとよどまりぬま^ーたがはやそのこともをはりま
したればくものそろくうごきいだせ^ーよよりさい^ーのおさ^ーふたつ
ぎんのらつばをふきたてま^ーた。このらつばなくもがうごけ^ーひとぐい
たびだらのえらせをするためでありますゆゑひとぐいこのことを

きくよりいそぎてんまくをたふみだうぐをかたづけらくだやろばよせおはせてもはやたびだちのよいをいたりまいた。さいもみやのうちよはいりまつりのまなぐをとりかたづけあさぎぬのにてこれをつみひとびとよになはせてともよたびだちいたりまいた。されどもおきてのはこだけのきれいなるぬのよつとみさいがじぶんよこれをになひてひとぐのさきよたちてまいりまいた。かやうよむかいのさいのおさがかみさまのめぐみをひとぐよつげまいたがたいいまにいゑすきりすどのほかけつてたれもめぐみをおつけくださるおかたのござりませぬ

〔第卅一章〕 じうににんの志のびものこと 民數記 第十三章

いすらへるのひとぐのだんくすみゆくまよよむかふよみゆるやまのみねのまさしくかなんよちがいなーとおもひいまのいかなるありさま

なるかはやくかなんのことをきくたーとおもふころをかみさまのお志
りなされてもうせよいひつけおほくのなかよりじうににんのををを
びかなんのくにのことがらをもらさずさぐりきたるやうよいひふくめて
やりまーた。このじうににんのものにすぐさま志のびのすがたとなりやま
かはをこえやうやくそのところよゆきそのあたりよあるきれいなるはな
ばたけやひつじをかふどころありまたにきのみでこくなどのよくでき
るはたけもありきのあなよはちみつのみちてながるゝどころなどそれ
それみまはり。なほもすくみゆけにきよきかはのほとりよぶだうのつる
よいどもおほひなるみぐなりたるどころなどうちすぎみやこよちかくす
すみゆきそのありさまをながむればみやこのぐるりいたかさいーがきを
きづきあげそのうちそとよいせだかきつはものともあまたすまひをまて
をりまーた。これらのことをすべてじうににんのものにまじうにちばか

りにて くはくみまはりぶだう、いちじくそのほかいろくのみをもち
てんまくのどころまでかへりまいた。いすらへるびどのこれらのみどとなる
くだものなごをみていままでもたこともなきものなりとておほひよお
どろきまいた。さてみまはりよゆきーものがまらすよのかなんのくに
まことよよきどころにてはちみつ、くだもの、くさきまでなにひとつも
ふそくなきどころなれどもわれくがかのくにへいりこむよいたいさう
むつかきことでござりますすべてみやこのそとのかまへをみればたかき
いーがきありてつよきひとぐがそのなかよすまひーをればわれくの
やうなよはきものはいることにはなはだむつかきこととつけまいたれ
ばこのことをきくーひとぐにいづれもおどろきまいた。されどかねてか
みさまのおんやくそくあることなればかれらにからだをふまかせまうす
はづなるよこゑをたてなくもありあるいにおそれふるへるものも

ありまいたが志のびまゆきーひとぐのうちまよーゆあかれぶといふふ
たりんじうぶんかみさままおまかせまうてをりまいたゆゑじうにん
ことばまよりひとぐがまんぱいするをきのとくまおもひさほむつか
きことでのなきほとまいさんでゆくがよろーからふとまうまいたれど
ひとぐのなほもころやすからずまたももうせとあゝろんをうらみよ
るもいぬすまよぢりさうだんをいたふたゝびゑじふとまかへるがよろ
ーからふもいまむりますすみゆくならばわれらいつよきかるんびとま
ころさるゝよりほかになーたへもうせあゝろんまたのむともわれらを
ぶじまつれてゆくことかなふまじさればほかのひとをゑらびかーらとな
てはやくゑじふとまかへるまたくをするがよひとたがひまかたりあひ
まいた。もうせあゝろんのこのことをきゝまたもひとぐがかみさまの
おんやくそくをわすれみちならぬたくみをはかるまおどろきちまたふれ

ふーかなーみまーた。そのときよーゆあかれぶのたちあがりてひとぐーよな
にゆゑさはぎたつやなにごどもかみさまのみごころよまかせおくならば
けつーてあーきことなーとよくときささどーまーたれどかれらのやすくさ
わぎたちふたりのことばをきくどころかいーをもつてふたりをころさう
といまよもとびかゝるいきほひなりーが かみさまのおんひかりたちまぢ
あらはれまぐやのうちよりかゝやまーたればこれよよりてひとぐーのやう
やくまづまりまーた。かみさまのささよりちよたはれぬたるもうせをおよ
びなされてこのいすらへるのひとぐーのわれをわづらはすことひとかたな
らずいまいやまひをかれらよくだーことぐーほろばーてわがばつをあら
はすべーとおほせられまーたこのおことばをきゝてもうせの**ことば**をつ
くーてかみさまよいのりをなーいままでたびくかれらのつみをおゆる
ーくださりまーたことなればどふどもふひとたびつみをおんゆるーくださ

れとやりーあげまーたゆるかみさまのそのいのりをきくあげたまひてや
まいをくだすことのおやめなさいまーたがひとぐいのかなんまいること
をゆるされずよーゆるあかれぶのはかりそのむすこのときとなりてかなん
まいることができるであらふとおほせられもうせいのこのことをひとぐい
まはなまーたらひとぐいづれもころまふそくをいだきもうせのとい
めるのもきかずかつてまかーらをゑらびひとぐいむりますすみゆるまー
たがかみさまのたすけなきことゆるおほくのひとぐいてきのためま
うちころされやりやくのこりのひとぐいもとのところまかへりまーた。
かのまのびのつかひまゆるまーたじうににんのひとぐいもよーゆるあかれ
ぶのはかりのこらずわづらひつきてまにまーた。これみなかみさまをまん
じませぬばちでござりませす

〔第卅二章〕

もうせあゝろん つみをおかすこと 民数記第二十章

さてもいすらへるのひとぐいあれののなかをさまよひつゝながのつき
ひをすぐるうちふたゝびみづなさところまいたりまいた。これよよつてひ
どぐいおほひよこまりまたももうせあゝろんのまへよきてふそくのかぎ
りいひかけこのうへのわれらをころゝくれるはうがかへつてたすかると
うらみまいた。せんたいこのところのみづのなきのみならずくだものさへ
もみることもなくいどいなんぎをかさねますがこれみなおのれがあゝき
こゝろよりもとめたることゆゑいまさらかみさまをうらみもうせあゝろん
よふそくなどいふわけでいござりませぬよかたくななるひとぐいなれば
あるかぎりのふそくをまうせあゝろんのふたりのひとぐいの
うれひをみるよ志のびすまくやのまへよひれふいなにどぞこのなんぎ

をすくひたまへといのりおられたればかみさまのたゞちとおほせられやすよ
なんぢつえをもちていはのそびよゆきひとぐをあつめていはよむかひ
みづのいづるやういひつけよとをへたまひよもうせのおきてのはこ
のそびよあるひとつのつえをもちきたりあゝろんとともよひとぐを
こゑあらゝかよよびあつめなんぢらむほんにんよわがなすことをみよと
いひつよつえをたかくふりあげいかりよまかせふたゞびまでいはをうち
たゞきおられたればふゝぎよもみづのたちおちいはのあいだよりながれいで
ひとぐのさらなりけものよいたるまでのををうるはよろこびました。
ひとぐのまたもかくかみさまのおんめぐみをうけましたがこのたびの
もうせあゝろんがひとぐとおなじくかなんよゆくことをとめられまし
た。そのわけをまうせばかみさまのおんいひつけをうけながらそれよそ
むきいはをうちたゞきのみならずかねてのをへよそむきいかりのこ

とろをもつてひとぐをよびたることよよりてかくなされーわけにてま
ことよあはれなることよござります。このもうせいのつねよかみさまのみ
ごころよまたがふてをりまいたゆるひとぐがまいどふそくなごまうーても
いかりーことよさらよござりませなんだよ。このたびのおほきよはらを
たてーいはをたつきまいたのいはなはだくちおーきことよござります。それ
よりふたりのおーきわざをいたーたところづきいろくおんわびをい
たーまーたれどかなんへいることよおゆるーがござりませなんだ。かくも
せのいかりまいたるもいすらへるびどのかたくななるころよたえかねて
のことよござりますゆるわれくがいまからかんがへてみませればさほど
ふかきつみどもおもはれませぬやうでござりますれどこのはらだちよりかみ
さまのおんいひつけをやぶりまいたことよよりてかくあはれなるありさま
よいたりまいたわけよござります。そののちかみさまのもうせよおんいひ

つけありて あゝろんをやまよつれのぼりあゝろんがみよつけたるさいー
の 去るーのきものをとりみなそのむすこよあたへさせ なされーよより
あゝろんのかみさまのおんばつをうくることを 去りやまよのぼるまへ
ひとぐよいとまごびをなーもうせよつれられやまよのぼりまーたぐも
はやふたごびかへりきませなんだ。これよよりてそのむすこよさいーのきも
のをきせあゝろんのあとのやくをつとめさせまーたかへすがへすもあゝ
ろんのかみさまのおんつけをまもらずかなんよいたらずーて 去にまーたの
まことよかなーきことござります。去かーかみさまのその つみをたー
てたまーひをゆるーたまへがかれの まさーく てんこくよまいりまーたで
ござりまーよふ

〔第卅三章〕

去んちうのへびのこと

民數記第二十一章

さてもいすらへるのひとぐいひろきのよさまよひながさあひだたびを
去てをりまゐたがそのあひだときぐいかなんへはいられるところまでへい
ちかよりますけれどもくもよみちびかれてよんどころなくほかのはふへゆき
はやくかなんよいらたいとおもひまゐてもいることをゆるされずひろきあ
れのよさまよふてをりまゐた。そのひとぐいばんなどのたべものもは
やどふからなくなりてゐまゐたれどまなにいまよたくさんありますゆゑい
のちよかゝるほどのふじゆういござりせせんはづだのよひとぐいまた
もまうせのまへよきてわれくいまなよたべあきたればほかのたべも
のをくださるかまたいもどのやうよゑじぶとへつれかへつてくだされま
せとまうまゐた。このまなといふものいまへよもまうたどほりまこ
とよきれいにてあぢはひもよくてんのつかひたちのたべものどもいへい
ほどのよきものにてかみさまのふかきおんめぐみよよりてくだされたを

もはやあきたとてふそくをいふと、いつよおろかなひとぐいでござりま
す。さてまたこのへんのあれのよ、いろいろのあきそくむいがあつて
つねよひとをがいします。がいすらへるじん、いさいはひかみさまのおんめ
ぐみよよりてまだひとりもそのなんよかゝりませなんだが、あまりひとぐ
が、かみさまよまたがひませぬ。ゆゑかみさまのおんはらだちをうけへびの
がいよあふやうよなりました。このあたりよをるおほくのへび、ひのも
へるやうなあかきくちをひらき、いすらへるびとよとびつきます。ゆゑひとび
どのおほひよおそれにげようとすれば、おひきたりおひまはりころべ、すぐ
よてやあーよかみつきました。がつひよそれよりやまひとなりひとりふ
たりとだんくよまぬものがおほくなるばかりにて、そのきずをなほす
ためのくすりといつて、いさらよなければひとぐもはなはだこまり、また
ももうせよたのみなにとぞこのがいをはらふてくだされとねぐふありさま

のいとふびんなれどもうせもみかねてまたもかみさまよいのりをあげこのたびこそもはやかれらもころをあらためたまふからどふぞかのへびのがいをおんゆるーくだされとまうしてねがひましたればかみさまのもうせよそのがひをのける志かたををへなされました。もうせのそのおつげをうけておほさまよろこびすぐさませんちうにてへびのかたちをつくりさほのささまつけへびよかまれたものがあれがこのつくりもののへびをみせました。これのまことよふーぎなる志かたでござりますれどかみさまのおんをへにてへびよかまれたいたみはげーくいまよも志ぬばかりのものもひとたびこれを見ればたちまちなほることゆるひとぐのこのほかよろこびました。このやうよひとぐのへびのがいのせんちうのへびにてなほりましたがわれくのせんどあだひゑはのあくまといふへびのためよつよきどくをうけつひよたまりひのきずとなりぢどくへゆかね

ばならぬこととなりました。このなんぎなるわざはひをたすけるものな
にでござりませよふいゑすきりすとがじふじかよおかよりなされたことが
すなはちさほのさきのまんちうのへびのやうなもののゆゑたまひようけ
たるきずをなほしてきよきてんこくよゆさたひとおもふおかたのはやく
いゑすをおたのみなさりませ。このよにていゑすのはかりたれもこのな
んぎからたすけてくださるおかたのござりませぬ

〔第卅四章〕

もうせのまぬること

復傳律令書第三十一章

さてもうせのかみさまのおんつけをうけてじぶんがまだこのよよう
まれぬことまでもよくまゐりてをりまいたゆゑ。いすらへるびどのた
めよこのよのはじめよありーことよりゑじふとよろつりたるのちのこ
とまでかきまゐるーまたおのがかみさまのおんをーへよまたがはずまてば

ちをうけたことまでくわくかきのせいつこのまきものをこらへま
たこのいつこのまきものなきゆうやくせん志のはじめよりむくわんめ
まででござります。そののちもはやじぶん志ぬべきとききたことを
志りまいたゆゑひとぐいといまごひ志ていひますよわれのいまかみさ
まのおんばつよりかなんといらず志て志なねばならぬときとなりた
りわが志るをくこのまきもののはじめよりかみさまのおんはた
らきをくはくかき志るせものゆゑなにとぞこれをそまつとせずいす
らへるびとのをどこもをんなもよませてよこれのみなわがころ
よりおもひかंगाへてかきあわらずかみさまのおんせいれいのみちびか
れて志るものなればなんぢらよくくころをこめかならずたいせ
つよまもれよといひつけました。なほいすらへるびのためよくせ
わをするよさひとを志らびわが志にのちの志をさせようとおもひ

すなはちかみさまよおねがひまうーまいたればよーゆあこそよかるべきとの
おんつげをうけまいたゆゑもうせのひどぐよむかひこのよーゆあこそ
われよかはりてよくなんぢらをみちびきてかなんよいらせるであらふと
いひきかせかつまたよーゆあをよびかみさまのなんぢよこのひどぐよを
つれかなんよゆくことをおんいひつけなされたればたどへかなんのもの
がいくさをもつてふせぎたよかふともかならずおそるよことよあらずた
だかみさまのおんたすけをたのむべーといひ。またもひどぐよをよびあ
つめわれのいまひやくにじうねんよなるみなるがかみさまのおんはつ
をうけて去ぬるなりなんぢらのよーゆあをつれゆくをたのめよぐうぞ
うををがむことなくたいまことのかみさまをうやまへとまりーまいた。か
くてもうせのひどぐよかみさまをほめるうたをうたはせまいたがこれ
のかみさまをわすれぬやうよさせるためでござりますそのうたもおはり

てもうせの かみさまのおほせよ 志たがひ やまよの ぼりまいたが ひどぐ
 もいまの もうせが 志ぬるときなりと わかれをおーみ みをくりながら これ
 までまいど もうせよ そむき かれよ 志たがはざりー ことなど かたり あひまこ
 どの ころより わかれを かなーみまいた。かやうよ もうせの やまよの ぼり
 まいたが つひよ かへりませなんだ さだめて かなん の きれい なる ところな
 どを みながら 志にまいたで ござりまーよふ。だんく おはなーまうーまいたと
 ぼりもうせの いすらへる びどの なんぎを みるよ 志の びすたふとき みをす
 て ひどぐを たすける ため なぐさ あひだの くるーみを うけまいた ほどの
 よきひとで ござりまいた ゆゑいよ 志にまするときよ やまより かなんのは
 たけよ ごとく、くだもの などの よく できて あるを みて ひどぐが はやく
 かのちよ いたる やうよいのりを 志て 志にまいたで ござりまーよふ

〔第卅五章〕

よーゆあ とらはぶの こと

士師記 第二章

さてもうせが 志にまーたのちのなにごとも よーゆあがもうせのかはりよ
なつてひとぐいをみちびきゐまーたがこのときかなんのかにまの かみ
のみどころよかなはぬものばかりすんでゐまーたゆゑいまのはやこれら
のものをほろぼしていすらへるびとをすまはせようとのかみさまのおぼ
めーでござりますることなればよーゆあにふたりのひとをゑらみていひま
すまのあくにんのすまひを志てをるゑりこといふみやこよ志のびいり
かれらのありさまをくはしくうかい加へりてわれよ志らせよかならずあ
くにんよみどがめられぬやうよといひつけてつかはまーたがこのゑりこ
のみちまの おほひなるかはありまたみやこのいりくちのまへよまう
まーたとほりたかきいーがきをつみまはーあまたのつはものそのうちそと

をまもりげんぢりよそなへてひくれよんをどづることなればふたりの志のびものひのくれぬうちよいりこさんとひそかよかはのあさせをわたりみどがめられぬやうよかたちをやつーなんなくもんをどふりぬけらぶとまうすひとのやどやよつきまづあーをやすめまいた。そのときはやくもこのことをえりたものがありてわうのおへよゆさいすらへるものがふたりいまらはぶのいへよをりますぐこれひおほかたこのくにをうばふための志のびものでありまよふとつげまいた。わうひすぐさまとりてをつかはーそのふたりの志のびものをいけとりてこよといひつけまいたればたちまちとりてひらはぶのいへをとりかこみふたりの志のびものをはやくわがてへわたせとせめまいた。このときはぶひえんせつなるころをおこーなにどぞこのふたりをたすけんとしてきうよたひらなるやねよあげいとよとりたるあさからのおほくありまいたゆゑふたりをねさせてその

らへよこれを おほひて かくしよした。それゆゑとりてのものが すみぐいよ
でさがせどもとふくみわたらせ そのまゝかへりよたらはぶひぐく
れてからふたりをそつとやねよりおろしよづぶなんよこのすみたる
をよろこびふたりよむかひいすらへるのひとぐいにかみさまのおんたす
けをえたるものなればこのところよいりこむことにかならずちかきうち
でありよまよふおほかたそのときよこのくにのひとみなころさるゝ
ことでござりよまよふがわたくしよのちよもはよもまたきやうだいもあ
りますゆゑわたくしのえんぞくだけよとふぞすくふてくださりよせとたの
みましたそしてよのあけぬまよまろのそとへふたりをにがさふとおも
ひよしたガもんよままつてをりそのうへよまりのものもあまたあれはも
んよりいだしことよとてもむつかしひがさいはいこのいへよみやこのそ
とまはりのとてのうへよまたたものなればまをあけてふとさひもにて

ひとりづゝつりをろゝました。ふたりのつゝがなくまたをりたちていま
まばーかのいへをるならばかならずとりてのてよかつたであらふよ
このあやろさばーよをのがれたるのまことよさいはいなることとおほきよ
よろこびそのあかきひもをまどよかけをくべーわれらがせめきたるとき
のそのひもを去るよなんぢのいへのかならずたすくべーとやくそくを
なー。みつかのあいだやまよかくれそののちひそかよかはをわたりよ
ゆあよかくとつけまいたゆゑよゆあのかなんのひとががいすらへる
びどのせめきたるをふかくおそれぬることを去りまいた

〔第卅六章〕

よるだん ぐはのこど

士師記 第三四章

さてもよゆあのいすらへるびどをひきつれかなんのくにぎかひよるだん
といふかはまできまーたがなかくかちわたりのできるやうなかはでの

なくそこいふかくそのうへはゞもひろければどふたらよからふとぐづ
ぐづきてをるうちかみさまのおんたすけをえよーゆわのあさはやくおき
いでさいーらよおきてのはこをもたせひとぐもこれよつきまたがはせ
かはばたまできまーたときよーゆわのひとぐよむかひなんぢらかみさま
のおんわぎをみよといひまたさいーよなんぢらあーをかはよつけよと
いひつけまーたればさいーのよーゆわのことばよまたがひかはよはいりか
けまーたがふーぎよもそのときみづのふたつよわかれなかよひとすじ
のみちができまーた。さいーのおきてのはこをもちまよなかほとまで
ゆきひとぐのわたるをまつてをりまーたそれよよつてひとぐのなんな
くわたりまーた。よーゆわのあとよのこるじうににんのものよなんぢら
このかはをわたるときなかはよいたりなばそこよいーのあるをみるべ
ーそれをもちてゆけとまうーまーたがてうとかはのまんなかほとよい

ーのあるをみつけをのくひとつづもちてわたりましたこのいーのち
 のちまでのこーおきていすらへるびどの去そんよいたりせんどがかみさま
 のおんたすけをえてなんなくかはをわたりーことをおもひいだすため
 でござります。さてひどぐ、ののこらずかはをわたりたればさいーもまたか
 はよりあがりましたればみづのふたぐびもとのまよなりました。これを
 みるよりひどぐ、の^{||}かなんよちかづくをよろこぶのみならずかみさまの
 おんわざよふかくか感じました。かくかみのたすけをうけいすらへるのひ
 どぐ、の^{||}ますくすくみゆきましたれば^{||}ゑりこのわうもひどぐ、もおほひ
 よおそれましたがそのなか^{||}よらはぶばかりのすこーもおどろかずかのや
 くそくのわかきひもをまよよりさげいちどくのこらずひどごころよあつ
 まりてをりました。よーゆあもひどぐ、もつげあかきひものさげであるい
 へよやくそくもあれのみだりよいることなかれとまうりました。この

らはぶもむかひのぐらうぞうをたふとみまゐたひとでござりまゐたがいまの
まことの かみさまを 志んじまゐたゆゑこの さいはひが ござります。それよ
ひさかへ ありこのものいすらへる びどのいりきたらぬやうよもんを止め
てみやこのことへ ひとりもいださずげんぢうよまもりゐまゐた。志かゝも
とより あくにんのみ あつまりたる ことなれば かみさまよ ほろばされるとき
のきたをも 志らすよ ゐまするのふびんな ことで ござります。われくも
志らす 志らす つみをつくり かみさまの おんにくみを うけ しばさのひが
ちかづくをも 志らすよ をりまするの ありこのひととすこゝもちがひ
の ござりませぬ。ゆゑよ 志ばしもちちすてを かすその つみをくゐ あらため
らはぶの やうよすくひをまつが かんじんで ござります

〔第卅七章〕

ありこの べてのこと

士師記 第五六章

いすらへるのひとぐいのすでゑりこのものことまでまいりかみさま
のおんさーづをもちてをりまいたがこのひとぐいをみちびきたるよーゆわ
のもどよりいさまーきたいーやうなればひとぐいなにござもうちまかー
よーゆわがさーづをなすにかみさまのおぼーめーをつたふるなりとえん
じまーたゆゑゑりこいまうすゑおよばずたへひ、みづのなかなりとも
そむくべきゑあらずとさーづをそーとまつてゑまーた。あるときよーゆわ
のぢんしよぢかくをわゆみきたるひとりのいくさにんをみつけあなた
どちらをおたすけなさるひとなるやとたづねまーたればそのひとこたへて
われゑほはのへいたいのかーらであるとまうーまーたゆゑよーゆわの
すぐさまかーらをさげかれをうやまひまーたればかのひとよーゆわゑむか
ひこゝにかみさまのぞみたまふきよきところなればなんぢくつをぬげと
まうせーゑよりてよーゆわのすぐゑそのことばゑまたがひくつをぬぎま

いた。そのときかのひとりのいふさの志かたをくはしをへるさいよ
おきてのはこをかきあげさせほかの志ちにんのさいよのをのくひ
つじのつのももちらつばのやうよふきならしはこのまへをあるかせ。
またつよきものさい一のささよすませかたなややりなどもたぬもの
いあとよゆかせことづくぎやうれつをなしるこのぐるりをまはりま
した。かくひとぐいのむいかのあいだまいにちいちどづものをもいは
ずまづかあるさまはりまたもとのてんまくのどころへかへりやすま
した。るりこのものこのありさまをみておそれてあまいたが志ろのか
まへのじやうぶなるをたのみそなへもいたしませなんだ。かくてなぬかめ
よひひとぐいのてんまくへにかへらずまてなるとびまで志ろをめぐりお
はりよゆわいの志をあげてひとぐよむかいなんぢらさい一のらつば
をふくをかかばこ志をたてよ志をつくれ。かみさまもいまのなんぢら

よこのみやこをあたへたよふなればいさみすすみていりこめよされどあかき
ひもをさげたるいへのらはぶとそのまんないのをるところなればその
いへよをるひどぐをころすことなかれ。またたひよきものがあまたあ
るともじぶんじぶんのぶんどりものとする事なかれきんぎんなどの
さかづきあらばもちきたりてかみさまよさづけよとまうまいたをきよひ
どぐへのらつばのきこえるをもちてをりまいたがたちまちらつばのこゑが
きこゑまゝたゆゑいちどよときをつくりまいたがそのひよきにてゑりこの
とてのなんなくくづれまいたひどぐへのますくいさみてせめいりらはぶ
のまんどくのほかにをどこをんなのわかちなくどりやけものよいたる
までみなやりやかたなよかけてころまいたかなんのひどのゑりこのも
のがかくきりころされいへののこらずやきつくされまば一のうちよほろ
びたるをみておほきよおそれまいた。このゑりこのとてのくづれまいたも

まつたくひとのちからでなくかみさまのおんたすけよよりてたやすく
かちまゐたのでござりますかくおほくのひとのはるびるなかよらはぶの
おんぞくばかりたすけられまゐたがあなたもおほくのひとのうちより
おんたすけをうるやうよつねぐおねがひなさりませ

〔第卅八章〕

よーゆあのおぬること

士師記第二十四章

いすらへるびどのすでもおんたすけをせめおとーこのいきほひよほかくの
おんたすけをほろばさんとますくすくみおほくのどーつきをへてつひよ
かなんのくにぢうをみなごろーといたーまゐたがよーゆあのひとぐよ
むかひいまのわれくよてきたいするもののあるまひからよきものをわけ
あたへようとはたけ、はなどの、いへまでもふじゆうなさやうよくばり
つけまゐたゆゑひとぐのかなんのくにへかへりたるのみならずかさね

がさねのさいはいをえてふかくよろこんでをりまいた。よーゆあのおんめ
 ぐみのふかきかみさまをわすれぬためかなんのくにのまんかなる志キ
 いろといふところをゑらみまくやをたてひとぐいまいるやうまうー
 つけまいた。このまくやのさきよつくりーもちはこびのできるまくやなれど
 このたびのすへきりよまてろごかさずひとつところにてはいするため
 ござりまいた。かくてよーゆあのもはやいのちのおはるのちかきよありと
 みづからまりひとぐいよむかひのちのむかーよりぐうぞうをまんかうー
 たもののすみたるどころなればきやかねやいーにてつくりたるかたちの
 あるものがあまたあるであらふがもーみいだすことのあるとてもけつ
 いてをがむことをまてのならぬもーをがむならばかならずかみさまのおん
 ばつをうくるであらふとまうーまいたらひとぐいのこゑをそへてわれ
 われかならずぐうぞうのをがみませぬとまうーまいた。そのうちよーゆあの

かゝのきのまたにてひとつのはんをとりいだーひとぐ、がぐらうを
をがまぬといひましたことなどこまぐ、かきゑるーまたおほひなるいゝを
とりかゝのきのまたよおきひとぐ、よむかいこれのなんぢらぐやくそ
くのゑるーなればつねぐ、このいゝをみてわすれぬやうよせよとまうー
ひとぐ、をいへよかへーつひよそこにてまにましたがとーのひやくじう
ねんでござりました。さてあとよのこりーひとぐ、のはじめのやくそくを
かたくまもりゐましたれのちよゝまたもまよひだーきやいゝにていろ
いろのかたちをつくりこれらのものよひれふてまことのみちをわすれ
ましたのなさけなきこととでござります。まかゝわれくもかみさまのふか
きおんめぐみをえていゑすきりすとといふおんこよよりつみのあがな
ひをうけましたればこのごおんをわすれぬやうよいたさねばなりませぬ。ひ
ととまうーますものにくひものさものなどのよくよまよひやすきものな

ればよくく ころをつねねば なりませぬ まづ このよひ それでもよろい
からふが志にまいたのちいたまひのゆきまするところいどころであらふ
とかんがへてふたたびくるしみをうけぬやうなさるがかんじんなるつと
めでござります

をばり



SCB
4242

Division
Section

さうやくせんまよのはな一

北 甲

海 かい

黒 黒

甲

亞 亞



西 三

地 ち

中 ち

海 かい

箱 箱

亞 亞

土 と

耳 ち

三

其 けい

南 甲

埃 埃
及 及

紅 紅

海 かい

PL803

.044